
とある学生の大学生活

観測者0906

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある学生の大学生活

【Zコード】

Z3555Y

【作者名】

観測者0906

【あらすじ】

とある大学生天草政志あまくわまさしはある能力を持っていた。普通に過ごしたいと思っていた彼は、超能力者に絡まれてしまった。自分自身の能力に恐怖や不安を抱えている彼は、今日も大学卒業を目指して日々勉強に励んでいた。

彼もまた、学園都市の副産物であった。

原作に沿った話で進行していきたいので、「こんなの禁書目録じゃない！」「とか思つても、暖かく見守つて下されば幸いです。

書いている途中でこんな作品がありました。「とある最強の水分支配『hydro command』」この作品とは無関係なのでよろしくお願いします。晃甫さん、気が付かなくて申し訳ございません。

第1話（出会い）（前書き）

初めてデス。観測者0906です。宜しくお願ひします。

第1話（出合）

昔から俺はみんなに恐れられていた。いつも一人で……

「懐かしいな。こんな夢を見るなんて」

俺の名前は天草政志あまくさまさし。学園都市の大学生1年生だ。最近は、不穏は二コースもなく、至って平穏な生活を送っていた。

しかしそんなことをいつていられる時間ではなかった。いくら大學生といつても学習しなくてはならないので、遅刻はさくがにまずい。学校に遅れてしまつのでさつと身支度を済まして学校へ行つた。

* * *

「ねえ、この都市伝説知つてますか皆さん？」

「こんな感じで話しているのは佐天涙子さてんるいこだった。彼女はいつも都市伝説なんか調べては、美琴達に話しかけていた。

「結構、前の都市伝説ですよねそれ。一時期はとても流行つていたんですけど……」

「ひづいているのは、初春飾利はつしんしょりという少女じょしだった。彼女はコンピューターのことについて詳くわいしく、裏では守護神ごーるキーパーなどと呼ばれているのに気付かない彼女であった。

「そんな伝説はやるわけないではありませんの。だいたい、そんな噂有名ではありませんのよ」

「やうやう。それにそこまで蓄意的にやつてくれていいんだから、名乗り出るでしょ」

彼女らは白井黒子と御坂美琴の2人だった。彼女らは常盤台中学の1年生と2年生のルームメイトであるが黒子は美琴のことを探して見ているのである。

「それが最近またやつていろいろしてますよ。応用能力（オ・バスキル）ってこう名前で」

「やうなんですか？昔はもっとカッコ悪かった記憶があるんですけどねえ」

「ねえ、今度そいつ探してみない？」

いきなり美琴がいい出す。それを肯定しようとする涙子だったが。「ダメですよお姉さま。ジャッジメント風紀委員の権限を使ってでもとめに入りますわよ」

「えーそれはないですよ白井さん。せっかくこの話題を提供したのに・・・しかもすぐ近い第7学区にあるんですよーー」

「そりよ行きましょ黒子。こいつの本性を暴いてやりますよーー」

そういうて、彼女達はファミレスを出て行くのであった。

* * *

「おいおい、お前僕の財布ちゃんじゃなかつたかなあ。早く出した方が命のためだよ」

天草政志はチンピラに絡まれていた。ちょっと近道をしようとしたら絡まってしまったのである。しかし彼は全くおじけていなかった。

「怪我したくないのはお前らのほうだろ。俺は能力者だぜ、そのぐらいお前の頭でもわかるだろ?」

「こいつ、俺らのことわかつてないぜ。ははははーーみんな出てこいやー!」

そういつた後、彼の後ろから4・5人ほどの人が出てきた。

「俺らも能力者なんだぜ。しかも、強能力者なんだぜ。あきらめろよ。・・・アガ!!」

彼らは全員床に倒れていた。おそらく足の骨を折ったのだろう。何が起きたのかわからないという顔でみていた。

「「待ちなさい!!」「

美琴達もその場にいた。政志にも気付いていなかつた。理由は簡単。黒子が空間移動の大能力者（レベル4）だ。

「何だお前ら、ガキがこんな所に来るもんじゃねえぞ。ほら、帰れ

「あなたを暴行、その他諸々で連行します。ついて来て下さい」

「やだね。先に暴力をふるつてきたのはここいつ等の方なんだからな」

「それなら過剰防衛ですの」

「おっ、そつちは超電磁砲レーベルガンじゃねえか。超能力者（レベル5）がこんな所で何やってんだ？」

「どうだつていいじゃない。それよりアンタの能力なによ。教えるなれー？」

「いいこと教えてやる。俺の能力は水流操作ウォーターコントロールださつと帰んな。別名は応用能オーバースキル力だ」

「なら都合がいいわ。勝負しなさい。そうすればいいわ」

「ダメですよお姉さま……過剰防衛でもダメですわよ……」

「仕方ない手合わせ、といつことならやつてやつてもいいぞ、超電磁砲？」

「いいわよ。やつてやつてじやない」

第1話（玉露）（後書き）

次回の更新は遅れるかもしないです

第2話（戦い1）（前書き）

バトルメインで行きます。原作の方からは少し外れていきますのでそれでもいいと思う方は読んで下さい。宜しくお願いします。

第2話（戦い1）

天草政志と美琴達、合わせて5人は美琴達がよく来る川辺にいた。よく来ると言つても美琴が上条を追いかけるだけであつたが、

「うーならいでしょ、天草！」

「お姉さまー緊急の時は私が止めに入りますからねー！」

「わかつてゐわよ黒子」

「作戦会議は終わつたか、お譲ちゃん達」

天草は余裕な表情をしていた。

「あなたの能力は水流操作ウォーター・コントロールでしたわよね。一体水の何を操ることができるんですか？」

「いやあ、全般つて言つていた方がいいかな」

「そんなのどうでもいいわよ。アイツは能力者を狩つていた悪い能力者なんだから」

「イヤな風に言つてくれるな。先に手を出したのは彼らなんだたら

れ」

「それじゃあ行くわよーー！」

その時天草の体に電撃がぶつかつた。・・・しかし天草は動じな

かつた。動じなかつたのではない。動じることができなかつたとでも言つた方がいいのだろうか？

「どう？観念した？まあ、私の電撃を喰らつて立つていられる奴はあのバカしかいなけれど」

「何勝手に終わらせてるんだ、クソガキ？？」

「えつ？何で立つていられるわけ？そんなはずないでしょ！」

「そんな？お姉さまの電撃を喰らつて生きているものなど・・・」

「美坂さん、手加減したんですね？・・・それこまつてますー！」

彼女らは動搖を隠していられなかつた。それもそのはずだ。彼女の近くには超能力者（レベル5）がいて学園都市ではレベル5が最も強いのだ。しかも美琴は第3位の能力者だ。そんなもの防げる人間は1位か2位の2人だろう。

「俺の能力は水の全般を操ること。その理論を応用して体の周りに薄い水の膜をはつてているんだ。しかもその水の膜はただの水の膜じゃない。水圧7000メートルをゆうに越えているんだからな。さつきの電撃は全部水の中にたまつてているんだからな。」

「ならこれはどうよ！」

美琴は砂鉄の剣を作つていた。ウォーターポントロール彼女の得意分野は能力のバリエーションの多さだ。しかし水流操作の方がバリエーションが多い。

「川辺を選んだのが間違えだな。水がない土地を選べばガキの勝ち

だつたのにな」

そういうて天草は背後の川から大量の水を持って来ていた。

「何なんですかのあの水の量は！？」

「レベルは何なのよ！？」

美琴と白井は流石にここまで予測はできなかつた。

「最大容量、3トン。有効範囲200メートル。学園都市では最大級の範囲だな」

砂鉄の剣を丸^一と飲み込む水を彼女たちの目に焼き付けられた。

「ならこれならどうよ。私の別名にもなつていてる技よ」

周囲の砂鉄や石が小刻みに震えていた。

「超電磁砲^{レールガン}か。面白い技だな、がしかし……」

音速の3倍の砲撃が天草に突き当たつた。

「『めんな、こんな簡単に勝負が着いたらガキのプライドにも関わるだろ』」

天草は美琴の真後ろにいた。それに気がついた美琴は後ろにもう1つ超電磁砲を撃つた。が、

「だから、そんな大技何発も撃つちゃいけないだろ？」

「アンタ何したのよー！」

「なあに簡単なことや。水を足の裏で滑らせ、高速移動したのさ。摩擦の方は液体防御（ウォーターガード）でな。クソガキは帰つて勉強でもしてな」

「さつきからお姉さまをクソガキ、クソガキと…もう我慢なりませんわー！」

白井の空間移動で天草の体に鉄柱を打ち込んだ。
テレポート

「だ・か・ら効かないっていってんだよー！」

「つあが！」

白井の体が吹き飛んだ。天草の水流操作の前では何も意味をなさなかつた。

「ここまでいいだろ？、アレイスター聞こえているよな」

そんなことを言つて天草は水流移動で帰つて行つた。
その後の出来事には関与しない形で…

第2話（戦い1）（後書き）

いやあ、オリキャラ無双でしたね。しかも佐天さんと初春さんは完全に無視状態www更新遅れるかもとかいつて翌日更新。そんなドタバタですけど暖かく見守つて下さい。さよなら、誤字脱字など指摘お願いします

第3話（裏の世界と大学生活）（前書き）

やつと天草が大学生活する内容に入ります。お気に入りに登録してくれた方々ありがとうございます。能力名が多いので、そこは勘弁して下さい。では、

第3話（裏の世界と大学生活）

「天草、もつと成果を出せんのか？お主の父上はもつとゆうじことをしていたぞ」

「うるせいいな、ジジイ！ テメエは俺の相手をしているだけでいいんだ！」

「ほつほつほ、そう怒るでない。ハアツツ！」

「変な夢だつたな・・・そろそろ飯でも食うか」

天草はあの戦いの後すぐさま逃げていったのだ。

「しかし、超電磁砲は強かつたなあ。まつ水流移動^{ウォータースライド}の速さには誰にもかなわないがな」

そんなことを言つて天草は朝食の準備を始めるのであつた、が・・・

「食パンがない！！ 牛乳もない！ あげくなはてに冷蔵庫の中は空っぽ！」

「」のあり様だった。

「朝飯を「コンビニの弁当にすると活気がわいてくるもんなんだな」

大学は学園都市に20個しかない。学園都市はそもそも学校の町であって、卒業すれば出ていくのだ。そうなると大学の数は高校よりもグッと少なくなる。

「やべえ、最初の授業遅れちまつー。いつなつたら近道ー。」

近道をすると昨日のようにあんなことになるのだが、そんなことを気にしている時間ではなかつた。

裏道に入った瞬間、彼の目の前は日常から非常^{おもて}世界へ変わつてしまつた。

「「」の角を曲がつて左に」

「？？超なんなんですか。下部組織が情報の隠ぺいをしていたんですけど？」

そこには綱旗最愛、別名 窒素装甲^{オフガスアーマー}だつた。彼女が蹴散らしていたのは町の不穏分子。上層部に敵対しようとしていた連中だつた。

「つげ、窒素装甲じゃないか。何年ぶりだ？」

「水流操作さんじやないですか。なぜ超ここにいるんですか？」

「ちよっぴり大学の近道をしようとしてな、すまんな

彼らは「暗闇の5月計画」で一緒になつた暗い過去を持っていた。

「そうですか、でも見られたんで超通すわけにも行かなくなつてしましました」

「そうか、なら仕方ないな。でも俺は平和な日常に戻りたいんだ」

「そうですか ツツ！？」

そんな会話の中、平和な日常の中ではけた外れの音が聞こえた。
「暗闇の5月計画」で得た絹旗の能力は自動防御機能。天草も同じ
自動防御機能を持つていた。

「通してもらひよ、窒素装甲」

そんな中、暗闇から猫つたるいが聞こえた。

それは、麦野沈利だった。アイテムの実質的リーダー。学園都市
の超能力者（レベル5）で第4位の力を持つ彼女は原子崩し（メル
トダウナー）は電子を波でも粒子でもない状態に固定しそれを自由
自在に操れる能力だつた。

「絹旗、何こんなよわっちいクズに負けてんのよ。さつさと終わり
にして帰りたいんだけど・・・」

「むぎの、この人大能力者（レベル4）」

後ろで呟いていたのは滝壺理后だった。彼女はAIM拡散力場を
観測することができる能力追跡（AIMストーカー）大能力者だつ
た。しかし体晶を使わなければ、能力は大能力まで行かないのが難
点であつた。

「おやおや、原子崩しまで現れましたか。これは困った物です」

天草はいつも口調で話すことができなかつた。「暗闇の5月計画」では一方通行の人格を植え付けたため、口調までもが一方通行のようになつてしまつ。それを防ぐために別の口調にしたのだ。

「べらべら喋つてないで、絹旗を離してくんないかな。こいつには仕事が山積みなんだよ」

「いけませんねエ。こんな簡単に超能力者と大能力者が釣れるなんて・・・」

「うるさいんだよ、抵抗するならてめえの肉焼いてまる焦げにしてやるつか！」

「むさきの、体晶は？」

「まだいいや。使う時になつたら使うから用意だけはしておきな」

天草は冷静だつた。彼は水操ることができる。電子は水に触れさせれば水酸化物イオンと水素イオンに分かれ電子は無くなると思つていた・・・が電子の量が膨大過ぎた。

彼は常に水を持ち歩いている。しかしそのH⁻の水が一瞬でイオンになり、イオンが気体として空氣中にまかれてしまつた。水素は水ではない。水はあくまでもH⁻なのだ。H⁻だけでは操ることなど到底不可能。

「さつきの冷静さはビックに行つたのかなあー？」

「さつきのことですねエ。さつきと終わりにしてくれませんか？」

そういう天草は余った水で地面を叩いた。叩いたと言つても割つたという表現した方がいいのかもしない。叩いた地面からは大量の水が出てきた。

「知つてゐるかア、学園都市は下水を地下のパイプで送つてゐるンだ。供給にしてもそオだ。きれいな水と汚い水どっちで攻撃してほしイ！」

「つひ、けりかいね。でもこれなりーー。」

麦野はまた電子を放つていた。しかしここで彼の姿はなかつた。あつたのは流れる水と倒れた絹旗だった。

「逃げたわね。でもあんなに速く移動できるのかしら？」

「超あれでしょ。水流移動でしょ。」

「水流移動？ なにそれ、きぬはた、おいしいの？」

「あれですよ、水を使って滑らせるんですよ。それで高速移動できだと思います。わたしも墨素で超移動できるんですが、なにせ数セコンチが限度ですの」

「まあ、いいわ。次に会つたら必ず殺してやるから」

そこでコール音が鳴つた。携帯のコール音、至つて一般的な音だつた。それにもかかわらず麦野は出よつとしない。コール音が10回を超したあたりで麦野は、

「出よつとしてないのわかんない訳！ 気付けよこのバカーー！」

『私だけ好きでかけてるわけじゃないんだから！－好き勝手言わないでよ！－ で次の仕事の依頼。この犯行グループのリーダーがある大学の理事長なのそこを襲撃して。図面は今送るから。』

「無理、私水流操作とやつてたからそいつ殺すまで仕事は受け付けないよ。バ 力！」

『お得情報その1、その大学に水流操作が通つてる。』

「いくよ。縄旗、滝壺」

「フレンダは超どうするんです？」

「電話かけといたから問題なし。じゃいくよー」

「おー」

「やういってくれるのは滝壺だけか・・・」

「悩んでるふりをする麦野だつた。

* * *

学校には遅れてしまつたが2時限目の授業からはちゃんと受けられたので良かつた。そんな中、アイテムがやつて来たのを知る由もない天草であつた。

第3話（裏の世界と大学生活）（後書き）

すみません、次回の更新は遅れるかもしないです。それではよろしくです。時系列は魔術に入つて行きたいです・・・

第4話（崩壊する学園生活）（前書き）

どうも『観測者0906』です index_comicから変えさせていただきました。今回はバトルメインで行きたいと思います。

アイテムや超電磁砲も出たんでそろそろ過激になります。ではお楽しみください。

第4話（崩壊する学園生活）

* * *

「お主、本当に学園都市に行くんかの？まだ引き返してもいいのだぞ？」

「いぬせージジイ。テメエの教えなんて信じねえからな」

「元気じやの？まだできたばかりの『学園都市』といつ場所に行くのかの？」

「面白そだだからだ……それ以外の理由はない」

「お主もわかつておる？が、あれ（・・）は使つては行かんぞ」

「なんことわかつてゐる？ それじゃあ行つて来るぞ」

* * *

ガラガラと音が聞こえた。音がした方向を見る生徒が多数いた。彼らが見た先には天草政志あまくさまさしがいた。しかし彼らは授業中だったので眞面目にノートをとつていた彼らにとって天草は邪魔者でしかなかつた。

「『ぎつぎつセーフ・・・がしかし』から聞いても全くわからん

全くを持つて彼らの視界には入つていなかつたが、天草だけは違つた。

「近くに能力者がいるな。それも複数名。さらに大能力者が2人超
能力者が1人。恐ろしいな、でもさつきの感じとに似ているな。多
分原子崩し（メルトダウナー）と窒素装甲オフェンスアーマーとあと一人訳わかんない
奴か・・・」

そんなことをつぶやいていた彼であったが、そんな学校生活をい
きなりぶち壊す物が飛び出てきたのは言つまでもないことだつた。

「着いたわよ、絹旗、滝壺、フレンダ」

「傷は治つたのきぬはた？」

「学園都市の超得体のしれない化学物質で超治りましたよ」

「あんたら、なんかあつたわけ？仕事してたみたいだけど？」

「お前は黙つて仕事しな、フレンダ。アンタさつきの仕事はいつて
なかつたから報酬減額ね」

「えーーそれはないよ麦野～～」

そんな彼らの今回の仕事は大学の不穏分子の削除。大学の理事長
ら15名を殺すことだった。そのためなら、大学の崩壊ですら容認
してしまつという上層部の命令だった。

「うるさいのかな、水流操作ウォーターコントロール。たのしみだねえ」

「ねえねえ縄旗、麦野になんかあつた訳?」

「うう小声で話すのはフレンダ＝セイヴェルンであった。

「ああ、あれでしうね。さつきの仕事で超邪魔されたんでしう、
といつても私も超負けたんですけどね」

「ええーーー！縄旗でも負けちゃったの？」

「はいはい、そこ黙弁らない。報酬減額つと」

「じめんよ麦野ー つで仕事は？」

「大学の破壊とその経営陣の削除。簡単だからこれはあんたに任せ
せるわ」

「麦野は何してる訳?」

「私は水流操作を殺しに行つてきまーす」

「なるほど。超わかりました」

「それではよーいドンーー！」

「ううして彼女らの仕事が始まった。

* * *

天草はうつさにー？のペットボトルのふたを開けていた。理由は
簡単、自分の身に危険を感じたからだ。身の危険といつても常人に

はわからない感覚であった。普通一般人にとつて目の前に石が落ちていたとする。その石を見て右や左によけるのは常人感覚である。しかし天草にとつてはそれでは遅いのだ。同じ例でいうと、石が見えた瞬間に道を変える。それほどの精神でなかつたら、彼の住んでいた世界では生きていられないのだ。

「よつ、水流操作。生きてなきや困るよ。せつきの戦闘でアンタ逃げたんだからね」

「起きてますよ。」いつまで口調を抑えてるんですからねエ

「せつきの借り返すわよ。これでねー！」

原子崩し、それは多大な破壊力を持っているが弱点がある。それは、連続して攻撃できないことだ。連続で攻撃しようとすると、体の方が先に分解を始めてしまうからだ。

「ウォータースクロール ウォーターガード
水流移動、水流防御その他もうもう調べさせてもらつたわ

「それはそれはなんとも手間のかかる作業でした。ではこちらからも応戦させていただくことにしましちゃうか」

「それは出来るかしら？水管や水道は全部上層部に頼んでストップさせてもらつたわよ」

「・・・」

「それと出入り口は全部崩されてあるから外には出れない。アンタの持つている1?の水で終わりにするわよ」

「なんと、そこまでしましたか」

天草は内心焦っていた。彼はただ水を操ることしかできないのだ。無の場所から水を作りだすことはできないのだ。

「ほらほらほら……どんどん行くわよ、このクソ虫野郎……」

天草の装甲がどんどん無くなつて行くのが麦野の目でも確認できるほどになつていた。

「水がないからつて逃げてんじやないわよ……この腰ぬけが！」

「仕方ありません。これは到底使うものではありませんが使わせていただきます」

天草は右手にタロットカードの様なものを持つていた。それが何を意味するのかは今の麦野にはわからないが、麦野には遊びの様な物にしか見えてなかつたはずだ。

「何遊んでんだよ……ちゃんと戦つて死ねよバカ野郎……」

「手を抜いているわけではありません。下準備が必要なのですよつね！……」

その瞬間天草の周りで爆発が起きた。原子崩しが直撃したのだと思つていたが、実際はそうではない。彼の周囲に大量の水がわき出でていた。

「つなー? 下水の処理などは完璧だつたはずーなのに何で? ?」

「あなたに魔術といつてもわかるはずがないでしょう。たとえわかっていても信じないと思いますよ」

天草と聞いて珍しい名字だな、と思う人は一般人と自覚していると思う。でも、天草と聞いて天草式と思う団体もいる。

そう天草政志は魔術師だったのだ。

しかしここで疑問に思ってほしい。能力者に魔術は使えない。その定義は今も未来も変わらない。もし使つたとしても体のどこかに負荷がかかってしまい、怪我をするのだ。

しかし彼は例外だつた。彼は学園都市で第一号の能力者、今的能力開発には暗示や薬が使われるのだが、最初の能力開発はそうではなかつた。脳の一部を削り取つてしまつという至つて簡単に開発できるものだつた。しかし今ではこのようなやり方は行われてはいな
い。

危険すぎるのだ。天草も入れてこの実験を行つたものは400名。そこで能力が出てきたのは彼ただ一人だつた。そこから研究者は研究し今の開発の仕方を生み出したのだ。

「危険なので終わりにしましょう。ほら」

「ツひ……」

麦野はあつさりと終わつてしまつた。

天草は生み出した水で麦野の首を圧縮していた。結局彼女は何の成果も残せないまま仕事は完遂した。

第4話（崩壊する学園生活）（後書き）

どうも、説明文多いですね。そもそも能力者が魔術を使えないのは脳みその構造が違つてるだけであつて、天草の実験のように術者の脳みそを変化させれば魔術をその脳みそに令わせることだってできるはずです。

次回もよろしくお願いします。

第5話（再）（前書き）

どうも、これ書いてる時に気が付いたんですが「とある最強の水分支配『hydro command』」この作品を知つてしまいました。知つていた方には申し訳ございません。これとは全く世界観が違うので了承ください。

第5話（再）

魔術、それは才能の無い人間が才能のある人間に追いつくために生み出された技術。知っている者は少ないが世界の上に立つ者ならば知つてなければいけない技術だった。

「ああー・・・やつちやつたよ・・・」

天草政志は後悔していた。相手はたかが超能力者（レベル5）。世界を見渡せばもつと強い人間はいる。それなのに魔術を使つてしまつた。

「やっぱタロットカードじやあ、これが限界だよな。お札じゃないし」

彼の使つた魔術はもともと不作に悩まされた農民が雨が降るようになると、神々にお供え物をする形で使われていた。それを今回は彼の持つていた昼食 ハンバーグ弁当を生贅として水を生み出したのだ。

「あれ？ 今回はやけに静かだな」

彼が魔術を使える理由は他の能力者と脳の構造が違うからである。同じ脳の構造であれば、彼は運悪く死んでいたかもしれないのだ。

辺りを見渡す彼はある異変に気付いた。ここまで大騒動があつたにもかかわらず、アンチスキル警備員ジャッジメントや風紀委員がこないのだ。彼は事情を知らないので無理はないが。

「おかしいな、風紀委員に連絡でもするか」

連絡を取ろうとする彼だが携帯を見ると圏外の表示になっていた。
上層部が第17学区の回線を切つてしまつたのだ。

彼は結局自分の寮に帰ることにした。大学の情報を調べてみたが、なかつたことになつていた。おそらく、上の連中が情報操作でもしたのだろう。

「あ～～また大学が減っちゃつたよ。どうしてくれるんだつづーの」

大学が減る。こんなことを知つてゐる人間はおそらく数名しかいないうだろ。先程も言つたが上層部はこれを隠してゐる。もともと、25あつた大学だが今は19しかない。

「もう、裏道は通らないぞ！前から裏道を通ると変な奴らにしかあわないからな」

変な奴らといつてもはたから見ればそうかもしれない。だが、見方を変えれば超能力者と大能力者に会つてゐるのだ。まあ、彼も大能力者の一人なのだが。

とそんなことを考えて電車に乗ろうとしていた矢先に、彼はまた変人に会つてしまつた。

そうちそれは御坂美琴と白井黒子だった。彼女らもまた、買い物に

来ていたのだ。

(やべえ、ほんといやべえよ。つーか前戦った時俺、逃げたよね。うん、逃げた。あの性格じゃあまた勝負してくれって逃がしてくれねえよ。水はあるかな?)

彼があさつていたバッグにはペットボトルの空と勉強道具しか入つていなかつた。

「ん? この電磁波? 水流操作!!
ウォーター コントロール

「お姉さま、こんなところに水流操作がいるわけないです
「いや、こるわ。ほらそこ!」

彼女が指した先には誰もいなかつた。しかし彼女は見過してはいなかつた。そこには少量であるが蒸発しかかっている液体があつた。

「ほら、さつきまでいたんだわ! 行くわよ黒子。あいつには逃げられたけど、ほんとは水しか操れないただのヘボ能力者じゃない」

「お姉さまだつて人のこと言えませんのよ。ただの電気しか操れない能力者なんですよ」

「つべこべ言わずにこじてきなさい!」

「仕方あつませんの」

「おひして追う側と逃げる側の青春が始まった。」

「おつかしいなー。ここに残っていたはずなんだけどなあ」

「お姉さま、門限まであと2時間です。早く帰らないとあの寮監[テレポート]にびどく怒られてしましますわよ」

「門限なんて気にしない。次！！」

「ここ[テレポート]の裏路地……も居ないか」

「私の空間移動にも限度と[テレポート]るものがありますの」

「じゃあ、次で最後するからもう少しだけ」

「しょうがないですわね。本当に次で最後ですわよ？」

「駅前に　　つて……いた――――――――――――――

「本当にいたんですねの…？」

「あ……　逃げ切れなかつた」

「今度こそ勝負しなさい。アンタ大能力者でしょう。私の様な超能力者より弱いってことでしょうか？それなのになんで勝つちゃうわけ？意味わかんない。勝負よ勝負」

「やだね」

そんなやりとりをしていた彼らだがそのやり取りもそこで打ち切られることになった。

ズドオン！！そんな激しい音とともに田の前のビルが崩れていった。あまりにも現実ではないような目で見る白井と、現実世界でもありうるというような目で見る美琴と、これが日常だと言わんばかりの目で見る天草がいた。

その下にはなんと小さな子供が30名程度いた。どうさに美琴は超電磁砲レールガンを撃とうとするが、白井はそれを止めた。何せ小さな子供だ。超電磁砲の衝撃波を受けただけで転ぶような子供を眼の前に擊つには良心が咎めたのだ。しかしふるは崩落してくる。歯噛みしていた彼女よりも天草は迅速に動いた。

まずアスファルトに隠れていた水管が破れていた。そこから大量の水を操る彼は化け物に近い存在になっていた。落ちて来るビルをその大量の水が支えたのだ。そうしている間に小さな子どもたちは白井の指示で安全な場所に避難していた。

「ふう、こんなものでいいかな」

そういうって彼は水で支えていたビルの塊を粉々に砕いた。それはもつ「コンクリートとしてとらえることができないくらい、水の力にすこさを感じていた美琴がぼうっと立っていた。

そこへ警備員の車が来た。警備員はなぜか天草に深々と敬礼していた。

「黒子。何で警備員の人達、あいつに敬礼してるの？」

「お姉さま、私も昨日調べてみたんです。彼は天草政志21歳。大学生ですの」

「それとこれとなんの関係が？」

「天草政志は・・・初代風紀委員委員長でした。あくまでそれは非公式ですが」

「風紀委員長?そんな人つているの。風紀委員しか見ないけど」

「今はその席は空席になっています。副委員長ならいるのですが」

「誰も委員長になろうとしないの?」

「なるうとしないのではなく、なれないんです。委員長の権限はとても大きなものです。だから大抵の風紀委員は委員長に志願します。ですが委員長の選別は警備員が行います。そこで受かつた者が委員長になるんですの」

「じゃあ委員長にふさわしい人はまだアイツだけってこと？」

「そうなりますの。彼は実力、頭脳ともに優秀でしたので委員長になれたのです」

「そんな能力強い人や、頭のいい人なんて他にもたくさんいるじゃない」

「そうですの。ですからこんな噂が何年も前から流れているんです。『風紀委員委員長は永遠の架空ポジションだ』と」

「そんなのアイツに聞けばわかるじゃない」

「お姉さまー乱暴！」とほおやめ下れこ

美琴は早くも天草に攻撃しようとしていた。が天草はそれを見きつていたかのようにかわした。

「アンタ、風紀委員長なんですってね。いい気分なんじゃない？」

「そこまでいい気分じゃねえよ。仕事は多いは、能力者が暴れるはで大変なんだよ」

「でも今はそこには誰もいないんじゃない？ 委員長？」

「ちょっと、イラつときたな。勝負、受けて立つよ」

「じゃあ、そこの公園でね」

3人は公園へ移動してきた。そこで彼女は驚くべき真実を聞く

とになる。

「血口紹介をしよう。俺の名前は天草政志。元風紀委員委員長だ。他に質問は？」

「あります。なぜ風紀委員委員長はずつと空のポストですの？私が風紀委員になつてゐるときからずっと空席でしたの」

「それを答えていいかどうかはわからないけど一つだけいいことを教えてあげよう。この世界は少し狭い。ただそれだけだ」

「答えになつていませんの！…」

「それじゃあ、相談してみよう。これを教えて良かつたら右にあるブランコを破壊。悪かつたら左にあるシーソーを破壊」

「何を言つてますの？そんなこと誰がやるんですの？」

白井は闇に手を染めていなかつたのでわからなかつたが、美琴はわかつっていた。これは上層部の決定で行われていると。

美琴の考えはある意味では正解だったが、もう一つの意味からすれば不正解だった。これは上層部の決定ではない。上層部は判断しただけ。それを実行するのは空氣中の機械達だった。

「了解が得られた。君達もここで晴れて『闇』の仲間入りだ」
「了解が得られた。君達もここで晴れて『闇』の仲間入りだ」
の合図らしい。

「了解が得られた。君達もここで晴れて『闇』の仲間入りだ」

「黒子は帰つてなさい。門限のことを寮監に伝えて来て頂戴」

「お姉さまー」これは風紀委員に関する重大なことなのですわよーそれを見過いせなどといふには・・・」

「お願い黒子、本当に帰つて頂戴」

美琴は白井にこの話を聞いてほしくなかつた。聞いたらいつも上層部に狙われる身になるのだ。それは美琴と同じになつてしまつ。いつも自分のことが書庫パンクに登録されてしまう。書庫ならまだいい方かもしれない。美琴の場合、闇のデータベースに保管されてしまつているのだから。

「わ、わかりましたの。でも、後でちゃんと聞きますわよ」

「わかつたわ、ありがと」

白井は虚空へ消えていった。彼女は空間移動を使ってこの場から消え去つたのだ。

「いいわ、聞かせなさい」

「では私の説明タイムの始まり始まり。私は今でも風紀委員委員長に戻ることが可能です。なぜなら風紀委員委員長の席はもともと私のためにある席だからなのです。あの席は私以外になることができません。理由はお察し下さい。これでわかりましたか?」

「わかつたわよ。でもね、あの子は風紀委員委員長も目指して来たのよ。それを目標に頑張つて来たのに・・・アンタはそれを不可

能にしたのよ！…わかつてゐるの…？」

「おやおや、勝負ではなかつたんですか？脱線してしまいました」

「いいわよ、アンタ黒子の分まで倒してあげるから」

「それはそれは恐ろしい限りです」

しかし美琴の攻撃は一つも通らなかつた。それを確認するまでもなく天草は、超能力者に開始10秒というあまりにも差がありますぎる勝利を收めてしまつた。

第5話（再）（後書き）

美琴が弱いのは仕方ありません。そういうようにオリジキャラを作つたんですけど・・・今回の話は再美琴みたいな感じに仕上げたつもりです。風紀委員委員長このポストは原作でも見られなかつたためオリジナルの設定を加えています。

質問、感想、ご指摘よろしくお願いします。

第6話（眞実の会話）（前書き）

どうも観測者0906です。ここまで見て下せつた方々本当にありがとうございます！続編は本編にのつどつてやって行きたいと思つので、ご支援よろしくお願ひします。

第6話（眞実の会話）

ここは第7学区のある病院。つい先ほど、常盤台中学2年御坂美琴が入院した病院だった。彼女の容体は命に別条はないが、2週間の入院を必要とするほどひどい怪我だった。

美琴は重苦しい瞼を開け、辺りを見回した。そこには全く知らない絵や、冷蔵庫などが置いてあった。

しかし彼女は知らない。この病院に暗部の監視役のやつらが、交代制で見回りしていることを。そもそも、超能力者の入院はニュースになるくらい大ことなのだ。それを上層部が監視しない訳がないのだ。

（あつ、私何やってたんだる。つていうか負けたんだよね）

御坂美琴は天草政志に負けていた。美琴が撃つた電撃は全てかわされ、天草の水が彼女の体をおもいきり叩いたのだ。叩くと言つても生半可なものではない。天草が手加減していなければ美琴は確実に死んでいた。超能力者（レベル5）が大能力者（レベル4）に手加減されて負けるというのは、果てしない侮辱ともとれるだろ？

「お姉さまー！大丈夫ですのー？」

「黒子、私は大丈夫だから」

「本当に大丈夫なんですか？それでは医者の方を呼んできますわね」

「ありがとうございます、黒子」

美琴は笑えていたのだろうか。自分自身では作り笑いを作つてい

たが上手く出来ていい自信がない。彼女は輪の中心に立つ人物だ。それなりのカリスマ性は持っていた。

カツカツカツ、とそんな足音が聞こえてきた。音がして、彼女の病室の扉が開いた。そこに立っている人物は冥土帰し（ヘヴンキヤンセラー）と呼ばれる学園都市最高峰の医者であった。

「もひ、喋れるのかな御坂君」

「ええまあ。ところで私の症状って何なんですか？」

「全身打撲と肋骨を1本折っているね。でも僕が治療したんだ2週間で治るよ」

「ありがとうございます……つて2週間！？そんなに入院するんですか！？」

「そりだらう。肋骨を折っていてしかも全身打撲だ。外の医療技術では1ヶ月は入院しなくてはならないね。それに比べたらいいほうだろう」

「その間ずっとここで過ごすんですか？」

「いや。頗は少し休養が必要だらう。どんなことにも限度つていうものがあるんだよ。それでだがね……」

そういう医者は白井を門限があるなどの理由をつけて帰らせてしまった。

「お姉さま、また明日お見舞いに来ますの。では」

彼女が病室を出た後、医者の様子が変化した。

「君は暗部を知っているね。」の学園都市の暗部だよ

「そんなこと話していいんですか！？先生の命も狙われますよ…！」

「心配しなくてもいい。僕は君よりももつと長く学園都市の闇つてやつを知っているからね。でだ、君は暗部の何を知りたい？」

「私は・・・天草っていう人のことが知りたいです。彼は何者なんですか？」

一瞬、背筋が凍るような感じが美琴にもわかつた。「ここまで知ればもう後はないぞ、と警戒するかのように・・・

「彼は僕の患者でもあり、学園都市最初の能力者でもあるんだ」

「学園都市で最初の能力者ですか？？」

「そう、彼は世界で初めて人工的に能力を開発させられた人物なんだ。しかもその開発方法がとんでもなく恐ろしかったんだ。まず脳の能力が発生すると思われる場所をくりぬくんだ。それで能力が開発出来たら成功。出来なかつたら失敗。とね」

「能力の開発つて暗記術や薬を投与して行うんじゃないですか？それなのになぜ？」

「学園都市も僕もまだまだ未熟だつた。それゆえあのような方法でしか能力を開発することができなかつたんだ。」

「それで、それだけなんですか？彼の正体って」

「今の能力者達は、自分だけの現実を持つていてるから現象を起こすことができる。しかし彼はそれを持っていないのだよ。理由は分かっていないが私見としてはおそらく脳本体をいじくったことで、自分でだけの現実とは違う現実を作つてしまつたのだろう」

「で、でも同じ能力が開発出来たつてことは私達と同じなんじゃないの？」

「それが違つんだ。君の能力を例えるといい。君は電子を一個レベルで操ることができるね。」

「はい」

彼女は頷く。医者の語りはまだまだ終わらなかつた。

「彼も水分子を1個レベルまで操ることができるんだ。しかし、彼はそれを逆手にとつて能力を使つていた。」

「どういう意味ですか？」

「水分子というのはH₂Oといつきわめて一般的な物質だ。しかし水というのはこのような気温では常に水になつてゐる。氷や氣体に変化せずにだ。どういうことだかわかるかい？」

「全く」

「彼の本質にあるのは、水を操る能力だ。君のように電子を操る能力に近いといつても過言ではない。電子は形をえない。水分子も

形を変えない。だが彼は、水分子の酸素原子の配列まで変化させることに成功した。それを応用するととても固い水や、柔らかい氷など現実世界ではありえない現象が起ころうのだ

「それってどういへんすか？」

「くら常盤台中学に通つていて、大学レベルの授業を受けていても価値観というのはわからないものである。

「ノーベル賞を2、3個はいけるね」

「ええ！？」

「大きい声は出さないでほしいな。他の患者さんに迷惑だよ。それと今日はもう寝なさい。寝る分だけ回復力がつくから」

美琴は頷く」としかできないほどに驚いていた。

美琴はベッドの上で横になっていた。時計の針は11時を回つていた。

(アイツそんなにすごい能力者だったんだ。でも、何で大能力者なのよ。水分子の配列を変えるほどの力があるんなら、超能力でも十分いけるはずなんだけどなあ)

そんなことに思いふけてじるつちに、睡魔に襲われ沈黙の世界へ沈んでいった。

「ふつふふ～～ん」

「お～お～インテックス、そんなに銭湯が好きなのか？」

「ジャパニーズの銭湯なんだよね……それは面白くない訳ないよ……！」

「あ～～はいはい。」

彼らは学園都市にも数少ない銭湯に行こうとしていたが、

「対象は移動中ですよ。スタイル」

「そんなことわかってはいるさ。でもね、僕はある少年がとても気になるんだ。僕の炎剣を何の術式もなく防いだんだよ？」

「学園都市の上層部にも連絡は入れてあります。しかし彼は何の能力も持たない一般人という報告が上がっています」

「上が情報を隠ぺいしているとでも？」

「その可能性も十分にありうるでしょう」

このようなことをしているのは神崎火織かんざき かおりとスタイル＝マグヌスであつた。しかしこの仕事の会話も途中でぶつつと途切れてしまうのであつた。

「念のため人払いを使っておきましょ」

そういうて準備する彼女かれいじょだが、彼女の手際に恐ろしい力が加わっていた・・・

第6話（眞実の会話）（後書き）

すみません。こんな途中で切つてしまつて。次回は神崎対天草にしたいと思つてます。

第7話（魔術師ｖｓ魔術師）（前書き）

前書きといつても、本当に話すことありません。最後まで見てくれればうれしいです。そろそろ、天草さんの紹介話を書くひとつ思っています。

アンケートtime 新キャラ出そうと思います。どんなのがいいと思いますか？意見があれば、感想などにお書き下さい。では。（能力名とその内容も）

第7話（魔術師ＶＳ魔術師）

神崎に加わっていた力は恐ろしいぐらい強烈であった。彼女は聖人である。この世に20人といない人間だ。その聖人でさえ、重いと感じる力であった。

一瞬の風絶音。それを合図にしたのか、神崎とステイルはその場を離れた。そこにあつたビルには一人の男が立っていた。そう、天草政志であつた。

「よう、神崎。元気にしてたか？」

「今あなたとこのような会話をする義務はありません。こちらの質問に答えなさい。なぜあなたは私の邪魔をするんですか？」

神崎火織。ブリエヌステス彼女は天草式の女教皇として活動してきていた。そして目の前にいる彼は、天草式の初代教皇の教えを受けてきた一番弟子だつた。実力は神崎が聖人としての力を持つていなければ、圧倒的に天草が有利な状況にあつた。しかし神崎の聖人としての力は強大であつて、天草がかなう敵ではなかつた。

「質問に答えよう。私はとある人物からの依頼で上条当麻を守つている。それで十分かね？」

「わかりました」

「火織。彼は一体どこの所属なんだ？そもそも魔術師なのか？」

「やあ、スタイル＝マグヌスさん。始めまして。私は天草政志といふのです。」

「いいだろ？ 君は魔術を知っている身だね。」ちらりの呟きに乗つておぐよ。『Forte 5931（我が名が最強である理由をこのに説明する）』

その時、彼の右手から炎剣が飛びってきた。それは蛇のようは柔らかさと、数多の物を焼きつくしてきた色をしていた。これまでこの炎剣でどんなに敵を焼いてきたのだろう。それすらも考えさせないほどにスタイルは早く動いた。そして炎剣を振り下ろす。周りの酸素を「ゴウ」という音が喰い尽す。

しかしそこに天草の姿はなかつた。彼は炎剣を事前に察知し、水流移動で移動していたのだ。彼の持つ水流移動での速度は、時速700ワオにも及ぶ。これを計算すると、0・1秒に11m移動することができるのだ。一番速いとされる動物、チーターでも秒速24m。どれくらい速いのかは予測出来るだろう。

「ふん、君は速いね。そこまで速かつたらアスリートにでもなればいいんじゃないのかな？」

「生憎、」ひりひりドーピングしてるんでね。それは無理だね

「スタイル！…やめなさい！…今のあなたの実力では不完全です！」

「火織、誰に向かつて言つているんだ？こんな奴聞いたこともないね。僕は実力のある者だっていくらでも焼いてきた。その自信はあるよ」

しかしこの自信はあっけなく碎かれることになった。

次のコノマ何秒の間にスタイルはコンクリートにクレーターを作

り、失神していた。

天草の行つたことは至つて単純なことだつた。まず水流移動でスティルの懷まで潜り込む。その後に地下からくみ上げてきた水でスティルの全面を思いつ切り叩く。それをたつた〇・七秒でやつた事だつた。

「神崎、これでいいか？邪魔だつたから一瞬で終わらせてやつたけど」

「あなたつて人はいつまでたつても変わらないものなんですね」

「そうかい。こっちも本気を出すから十分覚悟しとけや」

始めて動いたのは天草だつた。彼はところどころに穴を開けていた。それは何を意味するのか全く分からぬ神崎であつたが、天草が同じ場所に戻つてきて始めてわかつた。

その穴から少量ではあるが水が流れていた。彼女は知つていた。天草政志という男は水の術式が得意だつたことを。それは彼女が幼少のころから考えていたことだつた。天草の水の術式を一度も逆算することができなかつたのだ。同じ天草式の中でも彼の操る術式は逆算することができないことで有名だつた。それゆえ、天草との紅白戦では常に体術で勝つていたのだ。

しかし天草もバ力ではない。体術で勝てなかつた幼少の頃の弱点を能力で補つたのだ。^{ウォーターコントロール}水流操作を使つて、『暗闇の5月計画』に参加していた。これで得た彼の特権。^{アクセラレータ}一方通行の自動防御機能だつた。

「・・・七閃」

そう呴いた神崎の体からいくつものワイヤーが出てきた。それは

恐ろしいスピードで天草の体を貫いた。

（あなたは私の邪魔をしなければ良かったものの。天草式の教皇として天草式をまとめてくれればよかつたんです。それなのに学園都市に来て魔術を失つてしまつた・・・）

土埃が舞つていた。そのおかげで天草の遺体を見なくて済んだのは一種の救いかも知れなかつた。が、

「勝手に自己満足しないで下さい。そして勝手に終わらせないで下さい」

「つーー！」

彼女は焦つっていた。焦つていたのに冷静に判断することができた。

（何の術式を使つたのでしょうか？しかし能力者が魔術を使うと体に怪我を負うはず。怪我を負つてまでこのワイヤーを止めたかったのでしょうか？）

彼女の思惑は外れた。天草は怪我も負つてはいなかつたし、術式も使つていなかつた。唯一使つたのは能力だつた。しかも、ワイヤーは切れていた。

「言つただろ。甘く見んなつてな」

「一体何の術式を使つたのですか？あなたは水の術式にしか特化していなかつたはずです。いくら水の術式でもワイヤーが切れることはありません。それに能力でも私には体術戦で負けるでしょう」

「なら、やってみるか」

そう言つて彼は空中に飛んだ。それに応じたのか神崎も空中に飛んだ。そこで彼女は目を疑つた。

そこには体の周りに液体を帯びた男の姿が映つていた。人間は酸素や食べ物を食べないと生きてはいけない。それはどんな人間でも同じことだ。神崎でさえそうである。しかし目の前にいる男は人間なのか？体の周りに液体を帯びれば空気は入つて行かなくなる。たとえ空気を入れていたとしてもこの厚さでは10秒程度で空気の入れ替えをしなくてはならない。

間をとつて10秒が経つた。しかし一向に空気の入れ替えをしていない。これでは戦う前に死んでしまうのがオチだろう。

そこへ天草のとび蹴りが入つていった。神崎はギリギリで避けることに成功した。あの聖人がギリギリの範囲である。常人には見えない戦闘になつてきていた。お互い魔術は使わない。魔術を使えば同じ天草式の術式なので逆算されてしまう恐れが出て来る。それを防ぐために魔術を使つていないのだ。しかしこれでは均衡状態が続きどちらも不利になつてしまふ。

ここで流れが変わつた。天草が動いた。彼は魔術師でもあるが大能力者でもあつた。先程から穴を開けていた所から水が大量に溜まつていた。それも尋常じゃないほどの量だった。神崎は術式の逆算を始めていた。しかし彼女が知つていてる術式にはどれも当てはまらなかつた。そもそもそのはずだろう。天草が使つていてるのは魔術ではなく能力であつた。

「なぜ、体の周りを水でおおつているのですか？息ができなくなり死んでしまいますよ？」

「俺はこれでも死なねえんだよ。おぼえてろバカ」

(なら先に下水管の方を止めさせていただきましょう)

神崎は恐ろしいスピードで下水管に飛んでいった。そしてしつかり水を止めていたが、

またしても天草の攻防に劣りが出始めていた。

(おかしい。彼の術式は水に関するもの。水を止めれば大丈夫だと思つてはいたのですが・・・そう甘くはありませんか)

天草はまだ魔術を使つていない。だからこそ魔術の解析を行えなかつた。

「神崎、お前魔術の解析を行つていてだる。残念ながら魔術は使つていない。俺が使つているのは能力だ。学園都市の産物だろ?」

「そうでしたか。あなたは魔術を使つていなかつたのですか。でしたら魔術を使う前に倒してさし上げましょう」

彼女は一撃で天草を抑えるべく禁忌の術式を使うことを決意する。それは『唯閃』聖人としての力を最大限引き出し、刀で攻撃する魔術。彼女はそれを使うことを躊躇つていた。その魔術を使うことによつて天草を死なせてしまう可能性があるからだ。しかし彼女は確信した。「天草は格段に強くなっている。唯閃を使用しても彼は死なない」そう思つていれば彼女は唯閃を使うことができる。

「唯閃!!--」

彼女の柄から刀が抜き出される。その瞬間、力が爆発した。

天草は粉塵の中に隠れている。彼女は柄に刀をしまう。確信していた彼女だからこそ、ささいなミスを犯してしまった。それは次の

術式の準備を怠っていたことだった。しかし、いつもの彼女ならこのようなミスは決してしなかつた。今の彼女は昔の仲間を殺害してしまった。そのように感じているのかもしれない。

「スタイル、起きていますか？」

「まあね、でも彼は一体誰なんだ？君の仲間か？」

「スタイル、彼は・・・」

「まあ、勝手に終わらせたのは最大のミスでしたね」

「煙から声が聞こえた。スタイルと神崎はものすごい速度で振り向き、神崎は『七閃』をスタイルは炎剣をその場所に叩きこんでいた。しかし声は止まらない。

「この瞬間、貴様達の負けは確定した」

「なぜ、唯閃から逃れることができた？あれは聖人としてのパワーを最大限引き出したもの。それから逃れることなどできない！！」

スタイルは炎剣を3本まとめてぶつけた。しかし全て弾かれていった。

「聖人といつても神の力の数%。ただの人間にも到達できる地点ではあるんだよ」

その時スタイルと神崎の喉笛に水でできたレイピアの様な細い長剣の様なものが突き当たっていた。しかし彼らは諦めたりはしない。スタイルは炎剣を爆発させ大量の煙を作り目くらましにしてその場

脱出。神崎は聖人としての脚力で場から逃れた。

「七閃！！」

「俺に対してもし惜しみしてると、本当に負けるぞ？」

神崎の七閃を全て避け、反撃のレイピアを振るう。スタイルは攻撃をしていなかつた。彼は、あらゆる所にルーンを貼っていた。

「魔女狩りの王！」
イノケンティウス

スタイルの最大の攻撃が振るわれた。魔女狩りの王はルーンの破壊を行わなければ消えない、スタイルご自慢の術式だつた。

そんな幻想を天草は踏みつぶしてしまつ。周りに貼られたルーン。それを彼の持つ能力水流操作で脱色してしまつ。ルーンは脱色と染色で機能が分けられる。スタイルは炎による染色で効果を發揮していたが、天草はその色を水で落としてしまつた。これによりルーンの効果は真逆になつてしまい、魔女狩りの王は消え去つてしまう。

「そ、そんな・・・バカな・・・」

神崎は勝利に酔つている天草にとび蹴りを放つ。しかしその足はいとも簡単に掴まれてしまつ。天草は勝利になど酔つてはいなかつた。それは神崎を油断させるための作戦。そもそも彼の目的はスタイル達を倒すことではなかつた。

そしてレイピアを何十個も神崎の体に突きつける。それは地獄絵でみる針の山の様だつた。

「もう逃げられないな」

「あなたの目的は何なんですか！？我々の目的に害をなすようなものなのですか！？答えなさい！！」

「今ならいいだろ？ 答えてやるわ。俺の目的は依頼主の目的。俺とは一切関係のない」とさ。依頼主は・・・」

プルルルル、プルルルル、

タイミングを計ったかのように携帯の着信音が鳴った。天草は自分のポケットから折り畳み式の携帯電話を取り出す。

「もしもし？」

『作戦終了時刻、帰還可能、yes or no ?』

「yes」

天草は人払いを解き、神崎の目の前からいなくなっていた。

第7話（魔術師VS魔術師）（後書き）

遅くなつて申し訳ござりません！！！
偏頭痛で悩んでいたり、データの破壊があつたりと大変だつたん
ですが、よろしくおねがいします。

第8話（暗躍者）（前書き）

どうも、観測者0906です。今回も原作に沿つた話で展開していきたいと思います。感想、指摘いろいろあれば言ってください。宜しくお願いします。

第8話（暗躍者）

暗躍者はどこの世界にもいる。この学園都市にでも『アイテム』などの暗部がいるのだ。しかし、彼らは悪いことをするだけの存在ではない。世界の平和を守つたり、テロリスト達から民間人を助けたりなど・・・

天草政志もその一員だった。彼はとある人物から依頼を受け、暗躍者として活動していた。今も彼は依頼主の依頼で仕事を行っていた。

それが終わり自宅に帰ろうとする天草だが、ある人間が自分の目の前にいきなり現れた。その人物は案内人と呼ばれていた。^{テレポート}彼女の指示に従つて一緒に行動していた。するといきなり空間移動した。天草は少々戸惑つたが、ほんの一瞬で世界が変わった。彼が見ているのは赤い液体が入つた直径4m、全長10mを超す強化ガラスできた円筒の器だった。周りには大量の光が無数に散らばっていた。さらにコードやケーブルなど様々なものが中央の円筒につながっていた。そこにいた人物こそ天草の依頼主、学園都市統括理事長アレイスターであった。彼は人間として例えていいのか分からぬ状態にあつた。その人間は聖人にも見え、囚人にも見える。寿命は1700年を超してしまったという人間としての限界を超えていた。

「で、今回の依頼はこれで良かつたのか？アレイスター？」

赤い液体、弱アルカリ性培養液に浸るアレイスターは瞬き一つしないで答えた。

「今回はこれでいいだろ？しかし、君にはまだまだやつてもらわなければいけないことがたくさんある」

「今回はって……『上条当麻を死なせない』今回の依頼はこれだけだが、まだ神崎やスタイルは生きていたぞ。完全な依頼の完了はあいつらを殺すことに意味があるんじゃないか？」

「その通りなんだが君も知つてはいるだろう。こちら（科学）の人間があちら（魔術）の人間を倒してはいけないことを」

「知つてはいるが、俺は能力者であり魔術師でもあるんだ。土御門と同じポジションにいる。しかし、アイツは魔術を失ってしまったからな。陰陽道の道を完全にマスターした陰陽博士だったのにな」

「彼には他の仕事が待つている。君にも仕事をしてもらひよ」

アレイスタ の言葉に意味がこもつた。それは天草をまた戦場に駆り立てるることを示している。

「上条当麻の護衛。それに付け加えてもう一つ。暗部の失敗者の回収、保管だ」

「場所は？」

天草は問いたださない。質問したところでアレイスタ は何も教えてはくれないことを熟知しているからだ。それに、たとえ教えてくれたとしてもその情報が嘘であることは間違いないことだからだ。

「第23学区に専用の収容所を配備しておいた。そこを使つてくれて構わない。だが、万が一にも収容人が逃げた場合責任は君にとつてもらうよ」

失敗したら事実上の死刑。それを意味していた。

「アレイスター。一つ聞いていいか？なぜお前は俺に固執する。他の人材なんて腐るほどいるだろ？」

ビーカーの人間は女にも男にも聞こえる声でこう言った。

「君が私以外の初めてのホルスの人間だからだ」

天草は小萌の自宅前に来ていた。理由は上条当麻の護衛。上条に気付かれてもいいが、護衛していることだけは決して感づかれてはならないことが条件だった。

ドゴン！！

小萌宅のアパートの屋根が弾け飛んだ。そこからは天にも届きそうな光の柱が立っていた。

（アレイスター　はここまで予測していたのか・・・）

天草はアレイスター　はの命令でこの時間にここに訪れていた。依頼主の命令は絶対。従わない訳にもいかず、棒立ちしていた彼だが目に光が宿つた。

「最ッ高だねえ！――どつかでアレイスター　は見ているんだろうけど、いい仕事を用意してくれたよ！――」

天草はまず人払いの結界を作った。こんな大惨事だ、ヤジウマがこないわけがない。

(上条の安全を最優先に考え、行動か・・・面倒くさいな。さっさと終わらせて帰るとするか)

しかし、天草の予想に反してアパートからの騒音はもう止まっていた。

その中では上条当麻は『死んだ』ことになっているのを天草は知らずに小萌のアパートに入つていく。

「おや、神崎？お前、もう終わったのか？」

「あ、天草！－あなたつて人は何をしているんですか！？」

「神崎、落ち着け。インデックス禁書目録は無事だ。首輪が外れて自動書記は起動してはいな」

「なぜそこまで知つているんですか？」

「そうだ。僕たちでさえ知らない情報をそう容易く入手できるはずがない！－君はどこの所属なんだ！？」

魔術師2人は怒号の様な大声で問う。しかし、天草は答える気がないように無視して続ける。

「上条当麻は俺が回収していく。これは学園都市からの命令だ。お前達魔術師が絡んでくる場所じゃない」

「お前だつて魔術師じゃないか！？」

「俺がいつどこで魔法名を名乗つた？いつどこで魔術使つた？そ

れを証明できなければ俺はただの能力者だ」

自嘲気味に言つた天草は小さな微笑みを浮かべていた。

「とりあえず回収はしていく。お前たちは堂々とここ、学園都市から出ていってくれ。 そうそつ、手紙でも書くか？ 禁書目録を助けたお礼としてな」

そういうて彼はとある大学病院を目指すのであった。

第8話（暗躍者）（後書き）

はい、内容が薄いです。勘弁して下さい。前回のは内容が濃すぎただけなんです。

原作を忠実に守つてみました。原作ブレイカ　とはいわれたくはないので・・・

読んでくださいありがとうございました。

第9話（記憶の無くなつた少年との闘わう方）（前書き）

これまで見てトトわつてありがとハジケこまか。 こままでじんな出来そこのいの作品を見て下わつて・・・

今回も原作に沿つて進んで行きたいと思こまか。 では、宜しくお願いします。

第9話（記憶の無くなつた少年との関わり方）

上条当麻が気を失つて3時間。とある大学病院で待つていた天草は電話に出ていた。

「上条当麻はどうなつた方がいいんだ？」

無機質な声で返つて来る返答。

『彼は多分、記憶を失つているはずだ。君の正体を知らせててもかまわない。だが、注意はしておけ。君の正体は高校の新任教務ということにしておいた。そこで通じるだろ？』

「分かつたよ。そこでのカエル医者と一緒に会えればいいのか？」

『そう言つことだ。しかし、あの医者には君の本当の姿を見せてはいけない。わかつたか？』

ブツツ、つと電話を切つた天草に丁度いいタイミングで手術室から医者が出てきた。そこへ彼は質問する。

「上条当麻の容体はどうなつた？」

「君が第一発見者だつたかな。事情を話すためにちょっとこちに来てくれるかな」

医者は待合室に急ぐ。それについて行く天草は不思議なことを思つていた。

「君は彼に何をしたんだね？頭蓋骨を開けてスタンガンでも突っ込んだのかい？」

いたつて冷静に、怪しまれないように答える天草。

「僕は彼が転んでいる所を発見しただけですよ。それがどうかしたんですか？」

「僕に嘘をついても無駄だよ。本当のこと言つた方が身のためだ」

一気に不穏感が増す。しかし天草は淡々と答える。

「わかりました。彼はとある事故に遭いました。その内容は言えませんけど事故を起こしたんです。それが？」

「いつまでもしらを切つているのかね。まあいい、彼の容体を教えよ。彼は記憶喪失、というより記憶破壊になつた。記憶は戻らない。しかし、それはエピソードの部分。知識はあっても思い出がないと言つたほうがいい」

「わかりました。それだけ分かれば安心です」

「君は一体何者なんだね？」

「彼の新任の教務です。それだけ分かれば本当に安心です」

天草は慣れない演技をしていたので顔の筋肉が引き攣つっていた。痛いとは思わないが不愉快な思いがしただけだ。

「そうかい、彼は病室にいる。だが、面会は明日の9時過ぎからだ」

この日の夜は面倒なぐらい遅く感じていた・・・

面会時刻。最初に訪れていたのは担当医だった。上条の容体を彼に説明する。上条は少し不安げな表情を見せた。しかしスタイルの書いた手紙を見て彼の眼は変わった。何かが宿つたような感じがした。

担当医が出ていった後、インデックスという少女が入つていった。彼女は何かが死んだような人間と出会つた。しかしその人間は嘘だと言つていた。それに安堵したのか少女は少し潤んだ瞳から一滴の天然水が零れ落ちた。その少女は上条の頭に噛みついた。その後、インデックスという少女は病室から出でていってしまう。

そこに入つていったのは担当医。彼は上条の本当のことを見せる。告げるといつよりも一度教えるというような感じであった。

担当医が出た後、彼の病室に入つていったのは天草政志だつた。そこでの会話はインテックスという少女に聞かれていたら間違いなく彼女は壊れてしまつだろ？

「やあ、上条当麻君。君は今、何を感じているかね？」

「俺はこつもこんな感じですよ？」

上条は記憶があるふりをする。しかし、天草は安易な策を突破する。

「記憶を失っていることはわかる。お互い無駄なことは省こう。そこで、質問する。上条、君は今何を感じている？」

「そ、それは……どうしていいのか分からぬです」

上条の顔は曇っていた。記憶を失っている彼にとっては十分な答えだろ？ なにせ上条は記憶を失っている。スタイルが書いた手紙だけを頼りに少女をかばつたのだ。

「俺は、インテックスを守りたいです。どんなことがあつても、今の俺が救つていなくても、彼女の笑みだけは絶やしたくないです」

「いい判断だ。それでこそ上条当麻だ。今の上条当麻は昔の上条当麻と一緒にだ」

天草は内心、こんな切れ」とを語つていいのかわからなくなつた。

(あつちやーーなんか俺いい)と語つちやつたみたいな感じだな。

俺、何にも関係していないのに・・・

「それあなたは一体誰なんですか？」

上条の口が開く。

「俺は君の学校の新任教師、天草政志だ。ようしぐ。それと、君の第一発見者である」

「ああ、そうなんですか。ありがとうございます」

「上条もしっかり休んで夏休み明けには戻つてこいよ。後、記憶が無いことは誰にも話すんじゃないぞ」

「はい、わかりました」

帰り道、天草はアレイスターからの新しい仕事内容の確認をすべく、第23学区に移動していた。そこで彼の眼にはいったものは収容所。膨大な広さを持つてはいなかつたが、そこそこの大きさは持っていた。その地下には10階まであり、AIMジャマーや天草のやりやすいような設備が整っていた。それでも彼は喜ばない。いくら設備が整つていようと、逃げる奴はとことん逃げるのだ。そして最終的には天草がその能力で倒すしかない。

(アレイスター の奴め、こんな機能じゃ逃げられるばっかりじゃねえのかよ)

そんなことは口には出さない。口に出してしまえばアレイスターに全て見つかってしまう。あのアレイスター ならば、人の記憶にも侵入出来そうだが。

そんなことを思つて彼はここに暮らし始める。今まで住んでいた学生寮は手放していた。自分が通つていた大学もない。交友関係はもとから築いていない。彼が持つているのは金と仕事だけだった。

第9話（記憶の無くなつた少年との闇わり方）（後書き）

今回も短いです。休日になればもつと長いのがかけるので少しばかり時間を下さい。

次は鍊金術師編となります。内容は考案中ですけど頑張っていきたいと思つます。皆さん宜しくお願いします。

第10話（錬金術師の誓）（前書き）

どうも、今回も宜しくお願ひします。基本、天草の立場は失敗者の回収したことになります。

第1-0話（鍊金術師の皆）

窓の無いビル。衝撃拡散性複合素材を使い、核の嵐にも耐えられる
ような設計になっている。その中にはエレベーターもなく一つの部
屋しかなかった。そこにあるのは直径4メートル全長10メートル
にも及ぶ強化ガラスで出来た円筒だった。そして一切の明かりが無
い。在るのは無数のランプ。それは田舎の星空の様な輝きを見せて
いた。

そして円筒の前に居るのはステイル＝マグヌス。彼は必要悪の教
会に属する人間だ。しかし、科学の総本場学園都市にいる。しかも
学園都市統括理事会理事長の目の前にいる。彼は緊張していた。ア
レイスターの姿に驚いてはいたが、彼が最も驚いたのはアレイスター
の精神の在りようだ。いくら生命維持装置が目の前にあっても、
スタイルはそれに全てをまかせようとは思わない。しかし、アレイ
スターは生命維持装置に全てをまかせている。いくら生命維持装置
があつても所詮は機械だ。機械は誤作動を起こす危険性がある。そ
のような心配は彼には無いのだろうか。

『機械ができるることを人間がする必要はないだろ?』

「そのようですか」

『ここに来てもらつたのは他でもない。君たちの領域の人間がここ、
学園都市の一部を占拠してしまつた』

「その目的は?」

『吸血殺し(ディープブラッド)』

アレイスターは淡々と答える。しかし、いつ説明する。

『しかし、その占拠した人間は吸血殺しに執着心はない。』

「といいますと？」

『占拠した魔術師は希少価値のある人間であればだれでもよかつたらしい。それと、これが見取り図だ』

どこからか印刷された紙が20枚程度出てきた。

「しかし、吸血殺しなどが本当に存在するんですか？」

『吸血殺しは基本できには君たちの領分だろ。こちらの人間はある生物は全く認識していない』

とある生き物とは魔力が無限にある。ということは寿命が無いのだ。無限の魔力というのは魔術師にとつては夢でもあるだろ。

『君は、能力がなぜ発動するか分かるかい？』

「いえ、全く」

『それは、ただの認識のズレだ。能力者達は自分だけの現実を頭の中に置き、そのミクロの世界で物質を変化させるのだ』

「それでも分かりません」

『そもそもどう。これで分かつていたら君を処分せねばならぬ』

い

アレイスター いわく、世界はミクロとマクロによって分かれているらしい。その分かれ目を調べるのも彼の目的である。

アレイスター なんの操作をしたのか全く分からなかつたが、スタイルの後ろに最初、一緒に来た能力者がいた。

『それと、私は君たちに対する切り札を持っている。それを増援として送ろう』

「しかし、彼は能力者ではないんですか？」

『あれは、そちらに対する有益な情報を持つてはいない』

「そうですか」

スタイル＝マグヌスは虚空へ消えていった。
その5分後同じ部屋に天草政志がいた。さっきのスタイルの対応とは全く違っていた。その言葉は横暴で雑だった。

「アレイスター －！今回の仕事は何だ！？呼び出しておいてくだらない仕事だったら俺は辞めるぞ！－！」

『今回はスタイル＝マグヌス、上条当麻の三沢塾への攻撃を観察。そして必要であれば補佐だ。しかし、見られてはならない。』

「でもよお、あそこに入つていいくつていうことは、俺も魔術を使つたり能力を使つたりしなきやいけないのか？」

『必要であればな。それと、スタイル＝マグヌスの依頼がある。彼は禁書目録の前に魔女狩りの王置いて行くのだが、そこに敵が来る』

かもしだい。そこで禁書田録を上条当麻の部屋にじびめておけ』

「様は子守りをしてるつてことか?」

天草はそのような内容にも不満を洩らさなかつた。しかし、子守と来た。天草は保育士の資格は持つてはいない。

『そりやうつことだ。では、行つて来い』

天草の仕事が始まつた。

ステイル＝マグヌスが上条の住んでいる寮にペタペタヒルーンを貼っていた。しかし彼らは気付いていない。その2階上に天草が待つていた。

(早く終わんねえかなあ・・・禁書田録の保護なんて結構難しそうだぞ)

上条宅前から彼らが出ていった。その瞬間を見計らって天草はベルンダから2階下に飛び降りる。彼には何の一つの怪我もない。彼は水流操作という能力を持つていて、全ての衝撃を水で受け流していた。

(おじやましまーす・・・つて!/?魔女狩りの王が発動してるし! !)

ステイル達が気付く0・4秒前に天草は魔女狩りの王をなぎ倒す。それによつてステイル達は気がつかない。

「こんにちは、宅急便です」

「な、なんのかな!?」

インデックスクはとても焦つていた。上条当麻が居ない時に人が訪れる機会はこれが初めてだつた。

「上条当麻さんのお宅でよろしいでしょうか?」ひかりはピザフットです。ピザ一〇人前ということだつたので宅配に来ました

「ピ、ピザ一〇人前!...早く入るんだよ!...」

(「こんな奴が禁書田録なのか?」)

そう考へていた天草だがそのよつな」ことを全く気にせずに中に入る。

「上条さんの伝言によりますと、『インテックスの食べ物を十分に用意してくれ。代金ならいくらでも払う。それとインテックス、アイスフロートの件は済まなかつた。これで許してくれ』だそうです」

「これは全くのウソだ。天草は大能力者なので実験金の金は大量に余つてゐる。これぐらいあ朝飯前だ」

「ふんーとうまはいつも、このぐらい食べてくわればいいんだよ」

「それともう一つ。『インテックス、その人が俺が来る前に世話を見てくれる人だ。失礼のないようにするんだぞ』といつことなので、上条様が戻つてこられるまでお世話をさせていただきます」

「うん!…で、このピザは食べていいのかな?」

「よろしくですとも。それと足りなくなつたら私に申して下れ。他の物も用意させたいただきます」

「ありがとうなんだよ!…そしていただきます!…」

あんなにあつたピザがほんの少しで空になる。

(嘘だら・・・1万円分のピザがめちゃくちゃ早く無くなつていいく
だと・・・)

「モグモグ、といりであなたの名前はなんのかな?」

「私で『じぞこ』ましょうか?私は天草政志と申します」

「政志だね!—こんな食べ物ありがとうなんだよ!—」

天草はミスを犯してしまった。それは、偽名を使っていたからのことだ。禁書田録は完全記憶能力を持っている。いまさら、名前を変えて逆に怪しまれるばかりだ。

このようなミスを抱えたまま、仕事を進めることになった。

第10話（錬金術師の物）（後書き）

あとがき・・・書くじゃない、ところのことで明日の分量を多くするためには頑張つて来ます。

誤字脱字、感想など待つてます。

見て下さつてありがとうございます。

第1-1話（知識の増幅）（前書き）

今回の内容は大幅に増やしていきたいと思います。駄文が多いと
思います。そこは勘弁して下さい。今回の内容で錬金術師編が終わ
ると思います。それではご覧ください。

第1-1話（知識の増幅）

天草政志は目の前の光景に呆然としていた。なぜなら、自分よりも小さい少女が天草でも食べられない量のピザを食べていたのだ。「この人間のどこにこんなに物が入るのだろう。

「おかわりを要求するんだよ！！」

しかも、完食。その光景はもはや、美しいと表現できそうだった。天草はお代りに対し、次々とオーダーを聞いていく。

「次は何がよろしいでしょうか？」

「日本の物が食べたいから・・・おっしゃーーーおっしが食べたいんだよーーー！」

天草は近くにある寿司屋に次々と注文を入れていく。その10分間、インデックスという名の少女と天草は親睦を深めていく。

「あなたはどうまの一休何なのかな？」

「私でしょーつか。私は上条当麻様に雇われた使用者でござります」

「でも、どうまはそんなにお金を持っていなかつたよ？」

インデックスから疑問の声が上がる。それに対し、天草は難しい顔をしていた。

(上条当麻つてそんなに金無かつたのかよ・・・どんな嘘をつけば

いいんだ)

心の中で苦戦する天草のもとに一種の救いが来た。
ピンポーン、

「宅配寿司屋です。」注文を承つて来ました

(グッドタイミング!! 話す内容は後で考えるとして、今は気分の切り替えが重要!)

「はいっていいんだよ! …… おもし、おもし」

インテックスは完全に天草のことを無視し寿司に夢中になつた。そして、それを受け取つたインテックスは即座に喰らいつき始めた。

「代金は1万と2000円になります」

「ほいよ」

天草は財布から1万2000円を宅配者に渡し、家の鍵を閉めた。

「ところで、そんなに食べても良いのでしょうか?」

「大丈夫なんだよ。それと、そんな敬語は辞めてほしいんだよ」

「わかつたよ。俺としてもこちの方がやりやすい」

天草は本題に入ろうとしていた。その内容は、天草が使う魔術、術式の強化だった。今までの彼では、ここから先幾度となく戦いが

待ちうけているだろ？。今の彼では力が足りない。このままではいつかやられてしまう。そつならぬいための禁書目録の内容だ。

「本題の入つていいか？」

「本題つてなんのこと？」

「さつきお前が玄関から出た時に、ルーンを見つけたはずだ。それで大体内容は理解してあるはずだ」

「何でルーンのことを知っているの？もしかしてあなたは魔術師」
インデックスの警戒心が高まる。しかし、天草はそんなことは気にせず、どんどん話を続けていく。

「お前は必要悪の教会の人間だ。ネセカリウスだが、ここ学園都市に居候としてすんでいる。しかも、その居候相手は上条当麻。幻想殺し（イマジンブレイカー）だ。これは学園都市と必要悪の教会で定めた協定のギリギリの範囲に収まっている」

「私にここから出ていけっていいのかな」

「いや違う。ここから出て行きたくなれば勝手な行動をするなあ。そう言つことだ」

インデックスの表情に安堵が見られた。彼女はここに住んでいたいのだわ。しかし、天草は無理難題を突き付ける。

「それにもう一つ。お前の頭に入つていてる10万3000冊の魔導書の中から水に関する内容を俺に教えてほしい」

「だめ！…」れはあなたが欲している物じゃない！…いくらなんでもそれだけは聞けないよ」

そこで、天草が倒れた。彼の体には気持ち悪い汗がびつとりと着いていた。

「あ、あはは…ああ…大丈夫。頭の内容は水に関するものだから…」

天草政志は原典を読んでしまった。読むと言つより盗み見したと言つた方がいいのだろうか。しかし、彼の頭の中にはぎっしりと内容が詰まっていた。

（水神…北欧神話…神道術式…）んな真黒いもんがなんでこんな子に収まつてんだよ…）

天草の頭の中には無数の原典の文字列が並んでいた。一冊でも読んでしまえば即、廃人。こんな世界の理を変えるものを読み込んだのだ。ただで済むはずがない。

「大丈夫！？早くそれを忘れて！…そつしないとあなたは壊れてしまう…」

インデックスの制止を聞かない天草は、それでも解析を進める。

（ポセイドン…くそ、これ以上は難しいか。しかし、諦めはしねえ！…）

インデックスは自分の頭の中を盗み見られているのを防ごうとす

るが、なんの効果もなかつた。

「インデックス・・・お前は三沢塾に行くつもりなんだろう?」

彼女はスタイルの魔力を追つて三沢塾のある場所に行こうとしていた。でも、彼女はすぐには行こうとはしなかつた。なぜなら、天草がいたからだ。

「三沢塾はどのよろな術式や結界があるのかわからん。だが、お前の頭でも理解できない部分があるだろ? そこには決して近づくな」「どうするの? 君はここにいるのかな?」

「おれは・・・」

その瞬間、インデックスの目の前がゴミの塊になつていた。天草はインデックスが心配する直後に水流操作を使って窓から飛び降りていた。それでも彼の頭の中は原典に支配されそつだつた。

(何とかアイツの前から逃げてはきたが、一度休憩が必要だな)

そう思つた彼は、近くのハンバーガー屋に寄つた。しかしそこは満席。なぜなら今は夏真つ盛り。こんなクーラーの効いた所には誰も出たくはないだろ?

「ここはダメだな。他の場所に移動するしかないか・・・」

天草政志が行つた場所、それは個室サロン。監視の目は付いているが誰にも邪魔されずに休める場所の一つである。天草はその場所に移動しようとしていた。

窓の無いビルに住んでいるアレイスターは少しだけ不穏に思つていた。

『天草政志は禁書目録の知識を奪つたか。しかし、彼はホルスの人間だ。禁書目録の知識では彼にとつて不十分だろう。だが、これを乗り越えれば彼は私に近づくことができるのかもしれないな』

アレイスターは不気味に笑つていた。面白可笑しく笑うのではな

く、ただただ笑っていた。そこに気持ち悪いと思わない人間はいないだろう。それでも彼は笑っていた。

スタイルと上条は三沢塾の裏の世界で謎の球体に対し上条は、幻想殺し（イマジンブレイカー）を振るおうとしていた。そこでの上条は記憶にはない、しかし知識はある現実を突きつけられる。
『能力者に魔術は使えない。それは才能のない人間が才能のある人間に追いつくために作りだされたのが魔術』

上条の目の前の少女の体が一部爆発した。その動脈から大量に見える血液が流れ出した。そこに現れたのが吸血殺し（ディープブラッド）だ。彼女と上条は少女を助け出した。しかし、悲劇はそこ

では終わらなかつた。その少女は、突然現れた人間に一瞬で黄金になつた。本当に一瞬だつた。しかも、純金。そのような物質はどこにも存在していないので、突然生み出された。

「リメノマグナ
瞬間練金！－！」

せつ かく助けた目の前の少女が一瞬で黄金になつてしまつた。
そこで上条の何がが碎けた。

第1-1話（知識の増幅）（後書き）

なんか、最初の方で終わるとかほざいてた奴がいたなあ・・・
結局、終わりませんでした！！

第1-2話（鍊金術師との決着）（前書き）

なんか、更新速度遅くなつてきただので速度上げよつと思ひますが。
・・受験勉強しなきやいけなくなつちやつた（；—；）
という訳で、早く科学の方に行きたいのですが、いけない。更新
速度は変わらずに行きたいと思いますが、落ちたらすみません。

第1-2話（鍊金術師との決着）

上条が救つた少女が瞬間練金リメンマグナによって黄金化されてしまった。上条にはさっぱり瞬間練金の理屈は分からぬ。だが、彼の何かが切れた。

そこにアウレオルス＝ダミーがやって來た。しかし、彼の片腕と片足が金に化していた。

「材料！大量の材料があれば、あの魔術師にもかなうはずだ！！」

発狂にも似たおぞましい感情をあらわに上条に近づいてくる。そして瞬間練金を放ち、他の倒れている人間をも黄金と化していった。上条にはそれが許せることとは断じて思わない。そして彼にも飛んできた小道具を幻想殺し（イマジンブレイカー）であつさりと打ち碎く。

「俄然？なぜ貴様は我が瞬間練金を受けても黄金とならんのだ？」

「「ひやひや、ひるせえんだよーー！」

「何故？ どうか、その右手に人体の神秘が隠されているのだな。ならば、貴様を解体し新たな発見を眼にして見せようが」

上条は相手の話など聞いてはいなかつた。彼はただ単純に怒つていた。そして、彼はアウレオルス＝ダミーの元へ歩いてゆく。それはもう、檻から出た猛獸の様だつた。眼には光が籠つていない。アウレオルス＝ダミーのことを、獲物としてしか見ていないのだろう。上条の猛攻が始まる。彼は目の前に黄金の水たまりがあつた。アウレオルス＝ダミーと上条の間に役2m程度、走つて飛びには十分

だつたが、今の上条は走っていない。アウレオルス＝ダミーは、安全だと考えた。いくら瞬間練金を防げたとしても、それは右手のみ。そこ以外の場所に黄金をぶち当てれば、確実に黄金と化すと思つていたからだ。

しかし、その幻想は僥々^{はかな}消えてしまう。上条は水たまりを飛び越えていた。怒りが彼の身体能力を上げたのだろうか。そして、アウレオルス＝ダミーの体にしがみつく。このような至近距離では瞬間練金を撃つことはできない。たとえ撃つたとしても、自分に黄金が跳ね返つてくるだけだ。

そこで肉弾戦になつた。上条はマウントをとつて、ひたすら殴り続けた。何十発か殴つた後、彼はいきなり冷水を浴びたかのように冷静になつていた。その理由は、アウレオルス＝ダミーの顔だ。死にたくない・・・苦しみたくない・・・この痛みを消してほしい・・・

あらゆる負の感情を上条は『[』]えていた。

「イ、イギ、や、やめてくれ・・・」

上条は自分のしたこと悔やんだんのかもしれない。

そこで、アウレオルス＝ダミーは逃げ出した。

「まだ、 我を殺し足りんか」

「いや、 その逆だね。 君を楽にしてあげよ!」

スタイルはあくまでも、 神父だ。 迷っている子羊に対して、 手を差し伸べる側だ。

「貴様は悪魔なのか天使なのかどっちだ」

科学者というのは謎があれば解明する、 そのような人間だ。 しかし、 謎が目の前にあるのにそれをただただ見て死んでいくというのは、 とても報われない。

「神父として祈りを歌つてあげよ!」

「歌うな、 魔術師風情が」

その言葉を最後に、アウレオルス＝ダニーは焼け炭になつていった。

とある個室サロンの人間。

（湖の乙女・・・この術式が今、一番使い勝手がいいか。よし、試してみるか！－！）

湖の乙女とは『アーサー王の死』で出てきた女性である。彼女はアーサー王に対し、新しい剣エクスカリバーを渡している。そして、中世伝説で名高いマーリンが恋をした人物でもある。マーリンは中世の魔法使いだった。彼は恋をした湖の乙女に対し、自分の魔法を全て教えてしまう。しかし、湖の乙女はそのマーリンを湖に幽閉した。

殺した。

この伝説から生み出された術式が『湖の乙女』ヤングガールオブザレイクだ。この術式は湖の乙女は最初持っていたエクスカリバーと後半知った魔法がある。術式上では、エクスカリバーの剣術か、マーリンの強力な魔法、どちらかを選んで使いこなす術式だった。

(頭も回復してきたことだし、いっちょ頑張りますか!)

そして彼も、戦火の火種となっているあの場所に足を踏み入れることとなつた。

天草は三沢塾の中にいた。彼はコインの裏の世界にいた。

(誰もいないのかよ・・・この要塞、ぜつて一ピラミッドだな。もう、逃げらんねーようにしてあるし)

天草が階段を上がって上の階に着いた時、会話が聞こえた。普通の会話ではない、それは片方の人間が壊れているような話し方だつた。その違いは一般人にはわからないのかもしけないが、天草にはわかっている。このような人間は冷静に判断することができない。戦闘に参加するのなら今が絶好のチャンスだと。

しかし、壁から少しのぞいただけで世界が変わった。壊れている人格の人間が圧倒的な優位にいた。保護対象の上条は床に倒されていた。

(おいおい、この状況でどうやって勝とつといつのだね)

それでも、参加しなければ上条は守れない。上条の保護を最優先にし、まっすぐ突き進む。

「そこにいる人間も倒れ伏せ！！」

天草が気付かれた、と思ったよりも早く彼の体が反応した。天草体が床にピッタリとくっついていた。

「何故ばれたし？」

天草は流れをこちらに寄せぐるべく、会話を行ひ。

「今の足音でばれていたのだ。貴様ら！他に仲間はいないのか！？」

？」

「あ、天草先生！…どうしてここにいるんですか！？」

「何故お前がここにいる天草！？」

「さつき私にご飯をくれた人だ！」

3人とも顔見知りがいた。

（え、嘘でしょ・・・なんで、俺の知り合いがこんなにいるわけ？）

天草が疑問に思っていたが、相手の攻撃の方が速かつた。

「邪魔だ、女。死ね」

そう、アウレオルス＝イザードが言葉を放つと吸血殺しは魂が抜けたかのように倒れた。しかし、上条の右手、幻想殺しが触れた瞬間、彼女は息を吹き返した。

そして、ここから鍊金術師と素人の戦いが始まる。

第1-2話（錬金術師との決着）（後書き）

なんか、タイトルに決着とかほざいてるけど、決着つかなかつた
ね・・・

もへ、ほんとに何とかして下さり……錬金術師編でこんなに使いつ
とは思わなかつたので。

見て下さつてありがとうございます――

第1-3話（鍊金術師の手に入れたもの）（前書き）

どうも、観測者0906です。これまで見て下さった方々ありがとうございました。今回でやっと鍊金術師編が終わります。次は、一方通行編　楽しみだなあ。科学と魔術って言つたら、科学の方が考えやすいから・・・では、お楽しみください。

第1-3話（鍊金術師の手に入れたもの）

「窒息せよ」

アウレオルス＝イザードは宣言する。アウレオルス＝イザードはある術式を完成させていた。それは、どの鍊金術師も目的とする物、『世界の全てを頭の中でシユミレートする』ということだった。シユミレートだけならまだいい。しかし、魔術では、頭の中の現実を本物の現実に引っ張り出すことは意外と安易な物なのだ。しかし、その世界の法則が一つでも狂つていれば、その現実は成り立たない。

ツガ！…と、上条の首元に空気が入つてこなかつた。そこで、上条は自分の首に右手を当てた。そうすると、普通に呼吸ができるいた。

（こいつは俺の右手で消せる…冷静に対処すれば消せる…）

「感電死」

突然、上条の目の前に大量のスパークが飛び出していた。彼はとつさに右手を出した。計算して出したのではない。彼の右手を避雷針として対応していた。

「その右手、我が金色の練成を打ち碎いだと？おもしろい。ならばこれはどうだ」

アウレオルス＝イザードは瞬間に判断し、呟く。

「銃をこの手に、銃弾は魔弾。用途は射出。数は一つで十一分」

次々と答えていく。

「人間の動体視力を越える速度にて、射出を開始せよ」とんびん答えていて、刻々と上条の死へのタイムリミットが近づいてくる。

「準備は万端。十の暗器銃。同時射出を開始せよ」

「あぶねエーーーどけり、上条ーーー」

天草は叫びながら、上条の前に水で出来た壁を用意する。その水の壁にぶち当たった魔弾は、粉々に砕けていた。

「先に貴様を殺そつか」

「やれるもんなら、やってみやがれってんだヨ」

「ならば、死ね」

アウレオルス＝イザードが口に出した瞬間、天草は死ぬはずだった。しかし、天草はいまだに息をしていた。

「何故、我的言葉に反しているのだ」

「いいことを教えてやる。貴様は自分の頭の中でシユミレーントすることによってそれを現実に引っ張り出す。しかし、それは完全なシユミレーントだからだ。それに、反して動けばシユミレーントは崩れる。

それが、その術式といつていいのか分からんが、鍊金術の最高峰の盲点だ」

「ふははははは……そのようなことあるわけがない……そのようなことは、あつてはならないのだ……！」

しかし、天草は淡々と物事を進めていく。それは、マジックを見破った時の壮快感にも似ていた。それに酔つて叫ぶ一人の人間、天草政志。

「じゃあ、何で俺は死んでいない？それを証明することができれば貴様の勝ちだな」

「これで最後だ、死ね」

「これで死ななければ天草の勝利宣言、これで死ねばアウレオルス＝イザードが勝利することを意味する。しかし、どちらとも無かつた。上条がその戦闘に乱入し、アウレオルス＝イザードを殴つていた。

「お前、俺の先生に手をだすんじゃない！」

上条は記憶を失っている。天草から先生と教えてもらつただけで、それを信じていた。

「貴様！……その右手、その右手に力が集まつているのか。ならばよろしい。その右手からさざき落としてやるわ！」

そういうアウレオルス＝イザードはポケットから針を出し、自分の首に突き刺す。

「上条当麻！－奴の弱点はその針だ。針に注意して攻撃するんだ」

ステイルは床に張り付いたまま叫ぶ。

「ルーンの魔術師、貴様から殺してやろつ。宙を舞え、ロンドンの神父よ。そして弾けよ」

そう言つた瞬間、ステイルの体が内側から風船の様なパン、といふ音を立ててばらばらになる。

上条は考える。（さつきのステイルの言つたことは何だったのか？針が弱点とは一体どう言つことなのか？針が弱点としても一体どのような方法で攻めればいいのか？）

「さあ、始めようか。その不可解な右手。そき落として見せよ！」

上条はまだ考える。しかし、戦いは待つてはくれない。

「魔弾装填。準部完了。発射速度は先ほどと同じ」

「相手は俺がしてやるぜ！ 錬金術師！！」

天草はアイコンタクトで上条にメッセージを送る。

『考えるーお前の右手は勝てる力を持っている』

「貴様の対処法はもう、考えてある。その勝負、受けて立とうではないか」

天草は先ほど覚えたばかりの術式を発動する。その術式は、原典

の物であるため脳や体のあらゆる部分に深く傷を『え』てしまつ。しかし、それでも術式の発動を天草はやめない。

「湖の乙女！－出でこい。貴様の力を我に『えよ！－Young girl of the lake！－For sword！－

その怒号が聞こえた次の瞬間、天草の背後に水で出来た女性が出てきた。

『汝の望みは何か？刀か？魔術か？どちらだ？』

「刀だ！」

『よろしい、それ相応の対価を私は貰おう』

その一連の会話が終わつた。そうしたら、天草の右手に日本刀のようなものが掴まれてあつた。

「こい、アウレオルス＝イザード。貴様はここで負け組となる」

「いいだろう。射出用意・・・開始！」

普通の動体視力では見えないが一秒に何十本の魔弾でできたソードが飛んできた。

しかし、天草はそのすべてを日本刀で破壊、もしくは体ギリギリのラインで避けていた。

「ふん、いい動きをしているな」

「これは、紅朱刀。^{ベニシマトウ} 湖の乙女が用意してくれた一品だ。敵に対して

最適刀を用意してくれたんだ

「それがどうした。 我の目標はそこにあるのではない」

そう叫んだアウレオルス＝イザードは振り向き、上条の方を向いて魔弾を射出した。その瞬間、上条の右手が驚くほどきれいにさつぱり切断された

それでも上条のほほ笑みは崩れない。彼の持っている唯一の能力が取られたのだ。

「お前、俺の幻想殺しを右手を切つただけで無くせると思つてたのか？」

「ば、バカな・・・貴様の右手は切断された。まま、まさかあの時と同じように生き返るのか」

そう呟いた時にはもう、遅かった。

田の前にはスタイル＝マグヌスの姿がある。

「う、嘘だ。こんなはずではない。まさか、この不安がいけないのか。 そうだ、この不安さえ払拭出来ればいいのだ」

アウレオルス＝イザードはポケットから針を取りだすが手が震え、思つよう取り出すことができなかつた。

カラーンカラーン、と音がし針が床にばらまかれた。

「まだだ、まだ、終わってはいない」

「テメエの幻想は、はなっから終わってたんだよ」

そうアウレオルス＝イザードにいった上条の右手には龍の顎になつていた。

「テメーのやの幻想をぶち殺す」

第1-3話（錬金術師の手に入れたもの）（後書き）

なんか、何話つてこいつあとのかっここの所が、だんだん適当になつてきた。

後これ重要です。

受験勉強に入るので、週4回の更新を目標にしていきたいと思います。
ありがとうございました。

第1-4話（保護管理団）（前書き）

でも、ってか 最近こんなことしか書いていないんだけど……。悪役を作るのはいつもと難しい感じがしたなって、ふけつてしまつた。

では、行きます。日常編とこいつと一緒にしておあまます。

第1-4話（保護管理局）

上条当麻は気を失っていた。右肩から腕がさっぱり無くなっている。そこで、今まで気が持っていたことが不思議だらう。インティックスといつ少女はまだ気絶している。

「スタイル＝マグヌス。お前はこれからどうする？」「こいつらを連れて病院でもいくか？それとも、帰るか？」

「僕はアウレオルス＝イザードの顔を焼きつけて治癒でもするよ。彼はもう、賞金レベルだからね」

「そうか、それが終わったらこいつらを連れて病院へ行ってくれ。アウレオルス＝イザードはその作業が終わったら俺が貰っていくぞ」

スタイルは驚いた顔をする。それに比べて天草は平然を装つ。装うというよりも、これが彼の自然体なのだろう。

「ダメだ！これは魔術師が関係している出来事なんだ。君に対処できる物じゃない」

「残念ながらもう、許可は取つてある。これはイギリス聖教からの直々の紙切れだ」

そう言つて投げ出された紙を、スタイルはアウレオルス＝イザードの顔を焼きながら書面を見る。

「これは・・・本物だ。最大主教は何を考えているんだ！？」

アーカビシヨン

「という訳で、今回のアウレオルス＝イザードは俺が貰っていく。
拒否権はない」

アウレオルス＝イザードの顔の治癒が終了し、ステイルは上条の体を抱き、インテックスを優しく抱き、出ていった。

「なんだかんだで、ここを連れていくか

そんなんぶやきと共に三沢塾の窓から出していく。

天草政志は電話をしながらアウレオルス＝イザードを抱き、歩いていた。

「おい、上条当麻の右肩からでたあの龍の顎は一体何だ？」

電話の主は考へていたスピーチを答えるよつに、淡々と答える。

『それは自分で考えた方がいいだらう。それと君が坦いでいる人間は、保護管理局第901に入れておけ。そこならばそいつも出られまい』

「本当にいいのか?」こいつは現実を思つがままに変えることができ るんだぞ。それにそんなに部屋あんのか」

『そこには約1000の部屋がある。大丈夫だ、問題ない』

そんな会話をしている間に天草は、もう第23学区の保護管理局に着いていた。第23学区には空港や軍事施設などが置いてある。保護管理局は空港で入国出来なかつた人間を泊めておくための施設だつた。

しかし、それは建前。本当は軍事施設、といつても武器や戦闘機があるのではない。拷問施設となつてているのだ。拷問だが、アニメや漫画に出て来る暴力の拷問ではない。ここは学園都市だ。相手に薬を飲ませて、脳波でも測定すれば情報はいくらでも入る。ただそれだけの施設なのだ。しかし、それもまた建前。本来は天草政志専用に作られた管理局。管理局といつても、ほとんど天草政志の部屋。1000の部屋の内、100ほど天草の部屋なのだ。それ以外は囚人部屋。それも対能力者と対魔術師用の二つを持つている。ここから出られた人間など、存在するのかどうかも怪しい。

「アレイスター、本当にこんな部屋使つのか? そちらへんのホテルより豪華だぞ」

『それは、その人間に對して最も適したものが必要だからな』

「そら、そつか」

天草政志は901室に着いていた。その部屋はシャンデリアや絵画など、豪華なものが大量にあった。それは成金野郎が一括して買ったような物だった。

ドン、と音を立てて、アウレオルス＝イザードを適当に放り投げていた。

『これで作業終了。今回の依頼料何円だっけ？』

『600万だ。これで十分でなっかた場合は私に言え』

『了解いitt。話変わるけど、上条の見舞いって行つていいのか？』

『それはだな・・・フム、行つてもいいだろつ。だが、龍の顎については言及してはならない』

天草は携帯の電源を切つて、部屋の鍵を閉めた。この部屋の鍵は乱数使用で、暗号を解くには相当の時間がかかるらしい。

そんなことも気にせずに、上条の病室へ急いだ。

「あ、・・・超電磁砲・・・」
レールガン

天草が途中で会つたのは御坂美琴。学園都市の超能力者で、第3位の実力を持つている。

「あんた、天草政志でしょ。」Jリーグは名前まで調べたんだから

美琴は名前が合つていると言つだけで、勝ち誇つたような行動をしていた。

「名前は合つているけど、それがなんだよ？また勝負でも使用つてのか。こんな夜9時頃に？」

「そうじやないわ。アンタ、うちの黒子の夢を壊してくれたじゃない。ほら、あの子風紀委員長に立候補する予定だつたのよ。でも、アンタがその夢を壊してくれたおかげでかなり落ち込んでいたわ。何で、あんたみたいなのが風紀委員長なのよ？」

天草は自分より頭の悪い人間や、脳の無い人間に對してはやつつけ氣味の態度を取る性格だった。

「教えることは何もない。教えたとしても何の意味を持たない」

「あら、それは心外だわ。私だって、そんなお子様ではないわ。例えば、暗闇の5月計画。それ以外にも知つているわ」

天草政志のトラウマが蘇る。彼が感じたあの時の痛みは、誰とも

比較出来ないだろう。出来たとしても、その痛みを受けている人間はとっくに死んでいる。

「それだけか。そういうお前にあれだら？ さつきは研究所3つ壊してきました——っていう奴だろ？」

美琴は体中に汗がびっとうとびり付いていた。

「そんな確信、在るのかしら？ そんな証拠もないのに」

「証拠なり！」にあるわ」

そう天草が美琴に投げだしたのは、一枚の写真だった。それは先ほど、アレイスターから追加の情報量として貰つて来たものだった。

「お前の行動ぐら」、Jリヒちは把握してんだよ」

「そ、そんな」と言つても、私を逮捕するのかしら？」

「そんなことはしない。ただ、忠告をしにきただけだ。これ以上の実験阻止は無意味だ。これ以上やつても、何の成果も上げられないままクローン達は死んでゆく。アケセラレータ一方通行の手によつてな」

「これ以上の発言をしないまま、天草政志は病院へと駆け出していく。

第14話（保護管理局）（後書き）

受験勉強・・・
天草政志の身体能力パねエ！！

第1-5話（通院）（前書き）

土日の更新は続けていくつもりです。

今回から3巻の内容に入つていいくつもりです。（途中で途切れる
かもしれないけど・・・）そんな、こんなで進んでいきます。

第15話（通院）

夜の道を駆ける天草。彼の目指す場所は1つ。誰もたらい回しにしない病院。天草は事前に自分の身分の設定を行っていた。

「えっと、天草政志。学園都市高等学校教務、歳は・・・24？俺は21何だけどなあ・・・」

そんなことを言っている間に、病院へ着いてしまう。天草は自分の靴の裏に水を貼り付け、摩擦をなるべく少なくし走行していた。その速度は、およそ時速100キロ。しかし、これが彼の限界ではない。彼は交通事故を起こさない程度でありながら、さらに最高速度を叩きだしていた。

「また、君の連れかな」

力エルの様な顔をした医師がやつて来る。彼は、天草がここに来ることを事前に知っていたかのように落ち着いていた。

「よお、アイツの様子はどうだ？」

「あんなに綺麗に右腕を切られているとは、一体何が合ったんだ？」

「大したことじゃない。それよりも、いつもの薬、200日分くれ。足りなくなつた」

天草がいういつもの薬とは、彼は脳の一部を削り取つて出来た能力者だ。脳の一部を取つてしまつということは、何らかの障害を受けることになる。天草が受けた障害は、前頭葉の障害。彼は一時的

の人格がパズルのように壊れてしまったのだ。

それを何日ものリハビリによつて回復したが、前頭葉の働きを補う薬を毎日飲まなければならなかつた。

「200日つて、君はまた旅でもするのかい」

「そんなどこだ。上条の右腕はくついたのか？」

「大丈夫だ。僕を何だと思つている」

「そりゃ、それなら安心した」

天草は上条のいる病室へ行こうとしたが医師が立ちはだかつた。

「まだ面会は無理だよ。といつより本当の事情を話してほしいな」

「そんなこと、アレイスターにでも聞いてくりやいいだろ？ アイツの生命維持装置を作つたのはお前なんだから」

「彼から話を聞くなら、君の方がいいと思つてね」

しかし、天草は黙つたまま動かない。

「無理だ。これは俺から言つていいいものなのかどうかわからない。それに、上条の方が心配だしな」

「そりゃ・・・なら仕方がない。面会は明日になつてからだよ」

「なら、また明日来るよ」

彼の仕事はまだまだ続いている。

翌日。天草は病室ではなく学園都市統括理事会の会議に混ざっていた。会議に混ざるといつても、同じ場所にいるのではない。全員の映像がまとまつた部屋に置いてあるだけだ。

天草は統括理事会において発言権を持つていた。それは、統括理事会のメンバーに加え警備員^{アンチスキル}の代表。暗部のトップ。そして風紀委員委員長としての立場だった。

そこで提案者となつていてる人物が口を開く。

「では、皆さん。資料の32ページを見て下さい。そこにいるのが今、学園都市で最もレベル6に近い人間、一方通行^{アクセルレータ}です。彼は以前からの実験の対象者となつてもらっています。後、数か月でレベル6に行くでしょう。しかし、今の予算では通りつけません。そこで、統括理事会の皆さんから研究費の増加の許可を頂きたいのです」

(一方通行ねえ・・・俺の実験の張本人が今も実験しているとは)

統括理事会のメンバーからは異論は出なかつた。しかし、あくまでも黙認。という結果で追加の予算が下りた。

統括理事会のメンバーが続々と通信を切つていく間に、天草は提案者に質問する。

「おい、ちょっと待て。一方通行の能力は何だ? 答えろ」

「彼の能力はあらゆるベクトルを操ることができます。熱量、重力、運動量、様々なベクトルを操れることがあります」

「質問するけどよ、そいつを倒す方法ってのはあんのか?」

提案者はとまどつたような顔をしてこう答えた。

「それはわかりませんが、木原印ならわかるかと・・・」

「よし、そいつに連絡して俺と会話させる。いいな」

ドスの効いた声で天草は脅す。その2分もしない間に電話はつながつた。

「もしもし、木原ですけど」

木原数多。一方通行の能力開発に深くかかわった人物。彼は優秀な科学者なので、電話に出ることなどそうそうありえない。しかし、今回は統括理事会の御司令ということできつてきたわけだ。

「俺の名前は天草だ。一方通行の能力開発にかかわった人間なら、アソブの弱点ぐらい知つているだろう。言え」

「おいおい、何様なんだよ。教えてほしい時はひやんとした敬語で
言えよ」

天草は彼の言動に腹を立て、思いつ切り叫んだ。

「おい、テメエの居場所はわかつてんだ。今から殺しに行つてもいいんだぞ」

深い闇に關わった人間ならば、このオーラは感じとれていのはずだ。そこで、木原は納得したかのように答えた。

「アソツの反射する範囲は体から数ミリの所だ。その膜、ギリギリまで近づいてから弾き戻すとそれを反射して一方通行に当たついく。これでいいか？」

「上出来だ。最初っからこんな感じで言えばいいのによ」

天草はやつとの思いで会議から抜け出せた。そして、上条のいる病院に進むのであった。

「コンコン、と軽い音を立てるドアを開くとそこには上条当麻とい
ンデックスという翔じやがいた。

「元気そつだな。ほれ、お見舞いの品だ」

無造作に投げられた高級そうなクッキーの缶を、上条は慌てたそ
ぶりでキャッチする。

「すみません。先生がこんなものくれて」

「いいってことよ。それに、金なら心配すんな。医療費の方は全額、
俺が払つてやるからな」

「そこまではしなくてもいいですよ。俺が自分で払いますから」

そんな他愛もない会話の中に一つの異物を投げ込む少女・・・

「あの時は大丈夫だったのかな」

インデックス。

「おい、インデックス。先生と知り合いなのか?」

「知り合ひとは言えないけど、この人魔術師なんじゃないの、とつ
ま?」

「え・・・本当なんですか、先生!?」

病院なのに荒々しい声を上げる上条。

「魔術師とは言つてないよ」

焦る天草だが、上条のボディガードをしていふことに気がつかない上条当麻とインテックスであった。

「でも、わたしの頭の中の魔導書、かつてに読んだもん」

「セツレーやあ、あんまり覚えてないけど先生、魔術使つてたかも」

「ねえ、どんな魔術使つたの!?.教えてといつまーーー。」

「わかつたわかつた。だから焦るんじやありません。確か・・・『湖の乙女』っていうものだつたかな?」

「まあしーーまさか本当にあの術式を使つたんだねーーー。」

「ちよつと待てよ。『湖の乙女』使つたけど、あくまでも伝説聖劍ヒカルバの方を使つたんだぜ?」

「なんで!?.なんで使つたの!?.原典の魔術は体に毒なんだよーーー。」

「そう言つても『マーリンの魔法』の方が良かつたか?」

「セツレーハ問題じやないの!?.」

そこへ、3人の中で最も冷静な上条が提案する。

「おー一人とも、もつ少し静かにして下さいませんか」

「「「めんなさい」」

その後の病室では、魔術の話は無くなっていた。

第1-5話（通院）（後書き）

明日も更新する予定でございます。

誤字脱字、感想などお待ちしております。皆さん宜しくお願いします。

第1-6話（クローンの女の子達）（前書き）

たくさんのお客さんありがとうございます。これからも頑張って
いきたいと思いますので、宜しくお願いします。

今回から本編、第3巻。一方通行と天草政志の対決にしたいと思
います。御坂美琴の心情を書けるか心配なのが一番です。

第16話（クローンの女の子達）

病室を出た天草は、保護管理局へ向かっていた。彼はアレイスターからの依頼でアウレオルス＝イザードの尋問を行おうとしていた。

そして、保護管理局901室に入った。そこで見たアウレオルス＝イザードは三沢塾でみた人間とは全く違っていた。そこには、怯えた人間が部屋の角でうずくまっていた。

「な、何なんだ！？私の部屋に入つて来るなー！」

「はいはい、お前、自分の名前はわかるか？」

アウレオルス＝イザードは自分の名前がわかつてはいなかつた。

「わかつていなのはわかる。貴様には記憶が一切ないと思うからな」

「わかんないんだよー！私が何なのが一切わかんないんだよー！私は一体何なんだ」

「おい、アレイスター！何も知らないみたいだぞ？どうする、こいつ

部屋中の音響設備から一つの声が聞こえた。

『フム・・・ずっとそこに泊つていられるのも困が・・・そうだな、永久監禁でもいいんじゃないかな』

「え、永久監禁・・・」

アウレオルス＝イザードは喉からせりと絞り出したよつた声で言葉を吐く。

「アレイスター、ここでの尋問はやつぱりやらないのか？」

『もうこいつになるとこなるだらう』

「これからのお前の生活は、一生いろど暮らしてもいい。何も不自由はないはずだ」

「教えてくれ！..私は一体何なんだ！..」

「自分で考えてくれ」

小さな言葉を置いて、天草は901号室を出る。

天草は夜中のコンビニに夜食を買いに行っていた。

「あーー、なんで上条の教師になつたのかな」

『独り』とを呟く天草政志。それでも、仕事は待ってはくれない。
プルルルルル、プルルルルル、

「もしもし」

『仕事の内容を伝えようと思つてね。と、それを今から説明しよう』

電話の主は天草の事情を全く知らずに、淡々と答える。

『今回の依頼も簡単なものだ。一方通行の絶対能力者実験に対して超電磁砲アケセラレータが介入してきた。そして、超電磁砲は絶対能力者実験を壊滅寸前にまで追い込んでしまった。そこで、研究者達が議論した結果たくさんの研究施設に資産を分散することによって対策を講じた。そこでだ、超電磁砲がこの結果に対して反抗し、暴走する恐れが生じた。そのようなわけで、君には超電磁砲を死なせないようにしてもらいたい』

「依頼料は?」

『今日は一方通行が絡んでくるわけで、依頼料はとてもはずんでいる・・・1000万だ』

「1000万！？100万じゃないよなーー。」

『私は嘘はつかない。それと、アレイスター からの「命令で上条当麻が絡んでくるかも知れない」というものだ』

「そこで俺に何をしようと？」

『適当に上条当麻をうろつかせいい。それでも事件に關』してこなかつた場合、こちらで対策案を講じる』

「わかった。御坂美琴嬢の保護はどうやればいいんだ」

『超電磁砲は一方通行との直接戦闘で死ぬ恐れがある。まあこれはさつきも言つたが、戦闘を死なない程度に収めてくれればいい』

「いいだろ？、許可をする。金はいつもの口座に振り込んでおけ』

『了解いたしました』

こんな不穏な会話が街中に漂っていた。それなのに学生達は全然振り向こうとしない。

『田の前にいるのが一方通行だ』

彼がコンビニから出でていった時と同じタイミングで出でていった人物。髪の毛は真っ白で、体はとても細い。しかし、これで同じ男性

ということなのだ。しかし、眼は血の様な真つ赤だった。

そこで眼の前の人物に銃弾が当たった。天草は目の前の人間が血肉の塊になることは思ってはいなかつた。なせなら、天草は彼の能力を知つていた。あらゆるベクトルを操る能力。銃弾が当たつた程度で死ぬ第1位ではない。

銃弾は跳ね返る。天草は後ろを見た。一方通行の心配は全くしない。それに比べて、後ろで銃を撃つた人間の方が心配だつた。

「おいおい、大丈夫か？あっちの人間死んでいるんじゃないのか？」

「オイ、お前知つてんのか？」

「いや、全くといつていいほど知らんよ」

「なら、いいンじゃねエのか」

天草は一方通行との接点をなくし、仕事を再開させる。彼は御坂美琴嬢の死亡を防ぐことが仕事内容なので数百メートル先にいる瀕死の女の子には助けない。

その数百メートル先では・・・熱湯を頭からかぶつたような痛みに耐えながら、逃げている少女がいたことを天草は知らない。

「って言つても、実験場の資料渡されただけで御坂美琴が来るつてのはわかんないんだよなあ」

そんなことを囁きながら、天草は絶対能力者実験の戦場を眺めていた。彼はこの仕事が終わるまで、御坂美琴が実験場に現れるのを待機することになつていた。

その実験はおぞましいものだつた。一方通行がワンサイドゲームを繰り広げていた。それでも、苦しみの表情を一切出さないクローン。

「早くこの仕事が終わってくれないかな」

そこで事態は急変する。実験で一方通行がクローンに電車を落として帰ろうとしていたが、背後から大量の電流が流れてきた。そう、御坂美琴。またの名は、学園都市第3位、超電磁砲。彼女の表情は狂っていた。常人ではない。

「あああああああーー！」

一方通行の周りに砂埃が舞い散つた。それを合図にしたかのように、美琴は電撃での攻撃をやめた。

「オリジナルかア。ちょっと飽きてきたンだ。付き合え」

「なんで殺したのよーー答えなさいーー！」

美琴はコインを前に突き出しながら叫ぶ。その頃天草は仕事の内容の整理で頭がいっぱいだった。

(へえーこれが俺の仕事場か。楽しそうだな)

戦闘狂の人格が姿を現す。それに応じて天草はポケットに入っていた薬を、5錠飲みほした。

そのようなことに時間をかけていたせいか、天草が出るタイミングがさらに狭まつた。美琴は、彼女のクローンに悟られその場で崩れ、一方通行は歩いてその場から離れていった。天草は親切のつもりで列車のレールの設備作業を手伝おうとしたが、美琴に見つかってしまった。

「何でアンタがここにいんのよ・・・」

言葉に精が籠つていない。

「それはだな・・・う、うん・・・正直に言おう。俺はお前の保護役になつた」

「どうこいつ」とよーー!

感情的になつたのはいいが、少しばかり強すぎむ。彼女は右手に電気を集めて天草の胸倉を掴む。ここでふざけるほど天草は馬鹿じやない。

「お前が絶対能力者の実験を妨害していることによつて研究所が分散させられた。そこで、お前が自暴自棄に死んだりしないように俺がお前の死ぬ権利を握っている、つていうことになる」

「どこから的情報よ」

「俺は統括理事会で発言権を持っている身分だからな。多分、統括理事長じゃないか」

「私が死ぬことによつて妹達^{シスター}が救われる。そう思つていこまで来たのに、死ねなかつた」

「まだ、研究所を襲うのか?」

「多分ね。でも、アンタに守られて欲しくないわ」

「まあ、お前の死の権利を持つてゐることは結構なカードだからな。気を付けて帰れよ」

「つぬさいわよ」

仕事の体験の様なものができたとこの時の天草は思つていた。

第16話（クローンの女の子達）（後書き）

ヒヤツハー・・・テストの結果散々。

一方通行に天草は勝てるのでしょうか？では、ここで一つ。一方通行はあらゆるベクトルを操ることができ。天草は水のベクトルなら操ることができ。天草は、木原印から手前に引きもどすことで相手にぶつける、ということをわかっています。しかし、一方通行は全く知りません。しかも、天草の周りには常に水が漂っている。しかも、その流れは天草でもわからないくらいの乱数。いつたい、どちらが強いのでしょうか？

更新、遅れるかもしないです。

第17話（上條の生活）（前書き）

「ああ。上條の生活とか、何書けばいいのや？……タイトルミスった。頑張って書いていきたいと思つよ……」

第17話（上条の生活）

上条当麻の退院。彼はとある事件によって右腕を切断され、入院していた。しかし、その右腕は綺麗さっぱり、細胞をほとんど壊さずに切れていたのでくつ付ぐのに時間はかからなかつた。

病院から出た上条当麻に最初に襲いかかつた不幸は・・・補習の連絡だつた。

『上条ちやん。明日から補習ですか』

「あ。不幸だ」

上条当麻には夏休み以前の記憶が無い。記憶が無いと言つてもエピソード記憶という思いでなどの記憶が無くなつただけで、知識などの記憶はあるのだそうだ。

「つーか、補習つて俺どんだけ勉強してなかつたんだよ」

上条は昔の自分を恨む。しかし、それ以上にインテックスという少女の方が心配だつた。彼女は今の上条は知らないが、彼に助けられた身だつた。それで上条宅に居候しているのであつた。

今は上条が住んでいる学生寮に2人はいた。そこで朝食を取つていた。

「インテックス、俺は今日から学校の補習に行つてくるからな。でも、昼前には帰つて来ると思ひからじつとしていろよ

「私を誰だと思っているのかな。留守番なんてそんなの朝飯前だよ

「それと、毎までに俺が帰つてこなかつたら冷蔵庫にあるパンを食べてもいいぞ」

「わかつたんだよ」

「こんな些細な会話ができる」と上条は幸福と思つてゐる。皿などを片づけた彼は学校への支度をする。そして上条が初めて補習に行くのであつた。

学校に着いた上条は、自分の皿を疑つた。どこでもいから座れと、黒板に書いてあつたので真ん中に座つたが、教卓には自分より背の低い人間がいた。上条は自分の記憶が無くなつた事を、他人には知られないようにしてきた。知つてしまつことによつて、悲しむ人がいることを実感したからだ。

それにしても、眼の前の人間は先生なのか。身長が恐ろしいほど小さい。140もないぐらいだろう。

「上条ちゃん。教科書120ページの最初の一一行目から読んで下さい」

「先生、これ読んでも能力なんて使えるよつてならないですよ」

「上条ちゃん、まずは超能力とは何なのかを勉強するんです。なので読んで下せー」

泣きそつた顔で懇願する月詠小萌。

「そんなこと言つても、上条さんのやる気は出ないんですけどよーだ

「そんなこと言わないで読んで下せー」

「わかりましたよ・・・」

なんだかんだで、能力について勉強する上条当麻であった。しかし、彼にも能力はある。それは幻想殺し（イマジンブレイカ）。超能力だろうが、魔術だろうが、その右手に触れただけで、破壊してしまうというものだった。

上条が学校から帰ったのは午後12時過ぎだった。彼は自動販売機の前でうなだれていた。

（たしかに、2千円札なんて今どき流行らないも入れたけどさ・・・何にも反応ないって言つるのはおかしいんじゃないかな）

そこへ、一人の少女が現れた。

「ちょっとー。そんなところで突っ立つてんじゃないわよ。こいつは水をと水分補給しないと死んじゃうんだから」

御坂美琴。常盤台中学に通っている中学校2年生。上条の2つ下だ。しかし、上条にはそんな思い出など残っているわけでもなく、

「誰だお前？」

「わ・た・し・は、御坂美琴だつてんだろーが！」

彼女の体から青い電撃が飛んでくるが、上条の体は反射的に右手を突き出していた。これは電撃が見えてから手を出したのではない。そんなことができる人間はこの世にいないだろう。

というより、自動販売機の前でそんなことはしてはいけないと思うのだが・・・

彼らは気付くはずがなかつた。その自動販売機が在る公園の木の陰に2人の保護を命じられた、天草政志がいることには。

(何で、2人が知り合いなの?これって2人を守らなきゃいけないっていう、すごいハードな仕事じゃん。しかも、一方通行が絡んでるし、依頼額はあれで正解だったのかもな)

天草は知らないが、2人は自動販売機に電気を浴びせ大量のジュースと共に走つていった。

(やべえ。こりや追いかけないとまずいな)

「つーか、アンタって何事にも弱腰過ぎるのよ」

「そうですか？」

「こんなやり取りが始まっているところ、天草は現場に到着する。

「お姉さま？まあ、お姉さま。こんな殿方と密会ですか？」

虚空に現れた少女、白井黒子。彼女は風紀委員ジャッジメントとして活躍している。将来は風紀委員長にも立候補するらしい。

「何で私がこんなへンテコと密会しなくちゃいけないのよー。」

「それはさておき、今そこに天草さんがいましたよ。何かあったんですか？」

不意な発言に戸惑う3人。

「天草って、天草先生のこととかよ」

そう聞きつける上条。

「天草……なんでこんなところに居るのよ。もしかして、私の監視ウォーターパート？」

美琴は深く考える。

(何で、ばれたんだよ。しつかり液体屈折で隠れてたんだけど)

深くは考えないが、この後の始末を考える天草。

「出できなさいよ……そこにはいるんでしょ？」

美琴は振り向いて大きな木に言つたが、返答は返つてこない。

「天草さんなら、そちらの木の後ろですわよ」

「えつ、嘘」

勘違いをした美琴は赤面させていた。そこに一人の男性が現れる。天草政志。彼は仕事を知らせたくはなかった。

「『じめん』じめん。上条が退院したって聞いたから、ついてきたんだよ。『ermenな、上条』」

「そんなことないですけど、先生。こいつらと知り合いなんですか？」

今の天草にピュアな質問は刺になつて来ている。天草は上条の学生カバンの上から缶のジュースを抜き取り話し始めた。

「ちょっとだけな。それと、俺は先生じゃなくていいだ。天草さんとか政志さんとかで」

「先生にそれは悪いと思つんですね」

頭をかきながら、不自然な笑みで答える。

「まだまだ先生じゃないよ。大学からの体験試験みたいなので……

それと、さつまいの子は風紀委員の勲章付けてたじゃん。それ考えたの俺なんだ」

「話をそらすんじゃないわよ……」

苛立つたような声で美琴は天草に質問する。

「アンタはこいつの先生なのね。それ以外の関係は無い」と

「それは違うぞ、御坂。俺と先生は一緒に三沢塾で」

「上条、その話はしてはいけない部類に入るんだ。分かっているな」

天草に注意された上条は額き話を聞き始める。

「俺は大学一年生の人間だ。それと、そこのお譲ちゃん、なんて名前だ」

「白井黒子ですの」

「最近、物忘れが激しいからな。白井とやら、風紀委員長は諦めた方がいい。最近新しい風紀委員長が選別された」

「そんな話、私は聞いておりませと」とよ

「まだ内定だからな。その名前は……」

白井は神経を耳に集中させて天草の話を聞く。

「・・・天草政志だ」

「どうしてあなたが風紀委員長なんですね！？そんな仕事もしないで、書庫パンクには何も戦果をあげてはおりません…！」

「統括理事会からの」指令といつやつた。権限はいいからな。俺がその席に座つてやつた。学園都市総合議会での発言権もあるしな。そちらの御坂美琴さんにでも聞いたらいんじやないのか」

学園都市総合議会。それは、各部署から代表者1名で構成される議会。統括理事会のメンバーは参加資格を持つており、他にも少数ながら参加資格を持つている人間がいる。

「お姉さま。知っていたんですか？」

御坂美琴は黙つたまま深く深く頷いて下を向いていた。

第17話（上条の生活）（後書き）

なんか、第三巻の内容がぶっちゃけにてなくてすみません。次回も頑張つていいくので、感想や指摘宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3555y/>

とある学生の大学生活

2011年11月29日16時53分発行